BROADCAST CREATORS ASSOCIATION OF JAPAN

放送人の会

No.99
2023.09.29

〒102-0094　千代田区紀尾井町１－１　千代田放送会館　３階 TEL &fax03-3221-0019　Mail info@hosojin.jp
発行　一般社団法人・放送人の会　会長　今野　勉　　編集長　菅野高至、鈴木典之、逸見京子、田中典子、松尾羊一、
事務局　深尾隆一　須斎恵美子

デジタル時代の放送における言論表現の自由

放送人の会　副会長　前川　英樹

突然、「巻頭言」を書くことになってしまった。

丁度「消夏座談会」のタイミングで、今年上半期の放送状況について何か発言しなければと思っていたところだったので、まずそこから始めよう。

今年の春、国会で「放送法４条と政治的公平に関する」総務省内部文書と総務大臣(当時)の「捏造発言」が話題になった。それについての様々なリアクションの中で、「放送人は何故発言しないのか」というという指摘もあったので、私なりに放送法４条問題について書いてみようと思った。それが同封の「会報・特別寄稿」（注）私の意見である。書き出したら色々なことに連鎖反応が起こり、未整理のままで大分長くなってしまった。個人意見であるが、何かの議論の切っ掛けになるといい。

そうこうしている間に、総務省から「デジタル時代における 放送の将来像と制度の在り方に関する取りまとめ（第２次）案」が公表された(８／31)。これは「デジタル時代における放送制度の在り方に関する検討会」で議論されてきたもので、包括的に放送制度の在り方を見直そうという意図である。ＰＤＦで108ＭＢという膨大な量だ。

一方、自民党情報通信戦略調査会は「インターネット時代における公共放送のあり方などの提言」を松本総務大臣に申し入れた(９／６)。政と官は立場も機能も違うのは当然だが、いま放送という分野あるいは仕組みについて、様々なベクトルでの力学が働いていることが読み取れる。

今回の行政の作業でちょっと感心するのは、いわゆる「ＢＳ８トラポン」状況から「地デジ」に至る時代に議論された論点が、そのまま「通信と放送の融合」や「インフラとコンテンツ」をめぐる政策過程に引き継がれ、そして今回の報告書の議論の足場になっている。行政というのはなかなか強かである。

私は、郵政省・総務省や通産省・経産省の審議会や懇談会、研究会などなどに参加したことがある。当時、私は「メディア論から政策は生まれないが、メディア論で政策を撃つことはできる」と言っていたのだが、そんなものは彼らにとって何の痛痒も感じないのである。少し乱暴に言えば、それらの報告書や提言にメディア論というようなアプローチはない。メディア論とは無縁の力学で放送制度・政策は語られ決められていくのだ。

しかし、それでもメディア論あるいは放送とは何かを考え続けることが、「放送人」の存在理由ではなかろうか。その最初のハードルが、いま改めて「言論表現の自由」について考えることである。きわめて初歩的な認識だが、それは「国民の知る権利」に対応したものであって、そのためにはジャーナリズムとしての放送は「あらゆることにおいて」自らタブーを設けてはならないのだ。これは、放送法以前にメディアとしての放送の原則の問題なのである。そこから、「放送が他のメディアと何がどう違って、あるいは何が違わないのか」ということに改めて考えることになる。

いま、手元に「放送労働者の現実と幻影」という古い記事のコピーがある(「新日本文学」1965.3.)。私は「新日文」の熱心な読者ではなかったから、誰かに勧められて買ったのか、あるいは切り抜きをもらったのだろう。[北村美憲・俵しげゆき　往復書簡]という形になっている

「放送とは、わたしの定義によれば内容を備えた伝達手段、または、伝達手段そのものであるような文化、であって頭も尻尾もないものなのです」という北村氏の指摘に俵氏が答えているのだが、その最後に俵氏は「……しかし、よいではありませんか。わたしたちは、おたがいに三一を過ぎたところなんですから」と結んでいる。ジャーナリズムとしても表現分野としても、テレビはまだ若くて魅力的な時代だった。そこには「インフラとコンテンツ」というような産業論的発想を超えたところからテレビというメディアを語ろうとする熱意がある。お二人とも放送人の会の先輩だ。俵しげゆき氏は田原茂之氏で先年亡くなられた。北村美憲氏とは私はまだメール交換が続いている。

放送という行為には、形式と内容、制度と表現、産業と文化という二分法的発想ではとらえられない世界であって、であればこそ「デジタル多メディア時代の放送における言論表現の自由」について放送人自身が考えていかなければならないのだ。これを他人に任せてはならないと思う。

（注・編集部より）「特別寄稿」とは、執筆者本人の実費負担による掲載です。

恒例 消夏座談会 九月十六日(土)十四時～

2023前期の放送・ジャーナリズム

「A、B、C、Dは、段落記号のようなもので、特定の発言者を示すものではありません。

放送の今は？

司会　地球灼熱化の時代が来たと言われた23年の夏、放送も大きく揺れてます。思うところのキーワードを出し合いましょう。

A　ジャニーズの性加害で指摘された「悪しき沈黙」は日本の政治社会の宿痾。今こそ、原点に立ち返って、メディアが生まれ変わるチャンスにしなければならない。

B　一番大きな放送の問題は、総務省文書（2014～2015）が公表され明らかになった「放送法の政治的公平性の問題」です。

C　「総務省の文書問題」は極めて簡潔すぎるニュースで、何を伝えているのか、分かる人がいるのだろうかと思った。情報メディア論を教えている大学で、学生たちに録画したニュースを見せたら、殆どが分からなかった。

　記事を出したデスク・編責は何を考えていたのか？

D　放送現場の若い人の懸命な奮闘を誉めてあげたい。彼らは、僕ら旧世代では出来なかったことに挑戦している。

A　「ＶＩＶＡＮ」の功罪。テレビドラマの危機は続くのか。

B　危機と言えば、芸祭の大賞を受賞した作り手3人がＮＨＫを去った。ドラマのＫ氏、Ｉ氏。ドキュメンタリーのＫ氏。なぜＮＨＫを辞めねばならなかったのか。

C　**「らんまん」**は絶好調！　脚本の劇作家・長田育恵を称えたい。

　それに引き換え、「家康」はどうした！

D　ニッポン放送も絶好調。オールナイトニッポンがみな元気で、スポンサーが列をなして待っている。で、危機感を持ったＴＢＳラジオが制作費を削る。番組が削られ、穴が開いた時間をワイド化で埋める大改編となった。

A　メデタシを1つ。放送人グランプリで大賞を贈ったＥ特の**「ルポ 死亡退院 ～（略）～」のチームが新聞協会賞**を受賞した。表彰理由は「『精神科病院で患者虐待や高い死亡退院率』の一連のスクープと調査報道に対して」。ＣＰの真野修一氏と社会部のニュースデスク松井裕子氏が表彰を受ける。

Ｊの性虐待が問う、放送局と事務所

司会　一連の性虐待問題の表記は、被害者のフラッシュバックも考慮して、ここでは以下のような「略称」とする。

ジャニーズ＝Ｊ。ジャニーズ Jr.＝ジュニア。ジャニーズ事務所＝Ｊ事務所 or 事務所。

A　二〇一四年、Ｊ事務所が週刊文春を名誉毀損による損害賠償で訴えて、最高裁が棄却したした時点で、我々メディアはなぜ報道しなかったのか、なぜ沈黙したのか。今後、内省し、我々の責任を正確に伝えていきたい。

B　一つには、記者が仕事を差別していた。良い報道は大状況だけを伝える政治部が一番上で、芸能ネタは一番下にあると考え、芸能ネタのゴシップの中に社会部ネタがあるとは思わなかったのだ。芸能ネタは週刊誌やワイドショーに任せておけば良い、と。

C　民放も同じと思うが、ＮＨＫとＪ事務所は持ちつ持たれつの関係。ＮＨＫは、受信料を将来的に支える若者を取り込みたい。そこで、ジュニアが出演する番組枠を確保する。93年10月ＢＳ2で始まった**「アイドルオンステージ」**は**「ザ少年倶楽部」**となって今も続いている。30年続く長寿番組である。

　因みに、93年10月ジャニー喜多川は62歳であった。

D　60年代半ばから70年代の芸能事務所は、ナベプロ（渡辺プロダクション）が全盛で、ナベプロとＮＨＫ民放の関係も、Ｊと同じような持ちつ持たれつだった。

経緯を時系列で整理する

司会　独断でＪ問題を時系列に並べた。

3月18日：ＢＢＣのドキュメンタリー番組 "PREDATOR The Secret Scandal of J-Pop"（邦題**「J-POP の捕食者 秘められたスキャンダル」**インマン恵監督）が放映&配信。

4月14日：被害者カウアン・オカモト氏が日本外国特派員協会で会見を開く。週刊文春など週刊誌がフォロー。

5月14日：藤島社長、謝罪の動画を公開。

5月17日：ＮＨＫクローズアップ現代＋**「Ｊと性加害問題」**。

5月25日：報道1930**「英国人記者が見た『日本特有の問題』ジャニーズ性加害がうつす日本」**ＢＳ-ＴＢＳ

5月25日：テレビ東京、社長会見で「事務所やタレントとの対応について」言及。

6月17日：報道特集**「検証 2度の裁判とメディアの責任」**膳場アナらが謝罪。

6月29日：テレビ東京、社長会見で、「Ｊ事務所に性加害について、6月初めに、キチンと調査をして公表をして欲しい」と口頭で申し入れた、と発表。

7月24日～8月4日：国連人権理事会「ビジネスと人権」作業部会が訪日調査。政府や企業の人権への取り組みについて。その中でＪ事務所の性加害についても調査する。24年6月、国連に報告する。

8月4日：作業部会が記者会見。「タレント数百人が性的搾取と虐待」という深く憂慮すべき疑惑が明らかになった。

「あらゆるメディア・エンターテインメント企業が救済へのアクセスに便宜を図り、正当かつ透明な苦情処理メカニズムを確保すべきだ」、「日本の全企業に対し、積極的に人権デュー・ディリジェンスを実施し、虐待に対処するよう強く促す」。

この日は、テレビ東京のみコメントを発表。

8月29日：外部専門家再発防止特別チームが記者会見して「調査報告書」を公表。

9月7日：Ｊ事務所の会見。藤島社長は性加害を認め引責辞任。

　メディア各社がコメント発表。

9月13日：ＮＨＫクローズアップ現代＋**「Ｊ性加害と〝メディアの沈黙〟」**

9月14日：テレビ東京、「人権デュー・ディリジェンス」の一環で、Ｊ事務所に経営改革などの対応を急ぐよう書面で改めて申し入れた。（以下省略）

司会　各社の会見を受けたコメントの中で、テレビ東京が日経新聞社系列のメディアらしく、企業としての回答が際立つ。また、社長会見でも言及してＨＰに掲載している。

A　ＮＨＫの経営広報室のコメントはおざなりだが、現場は健闘している。報告書の指摘にこたえて、クローズアップ現代＋は2回に渡って不十分ながらもよくやっている。

　ＮＨＫのＯＢ大鹿文明氏がインタビューに

答えていた。04年の元紅白プロデューサーのリベート問題で、検証番組をやろうと必死で旗振ったのが大鹿さんでした。彼なりの男気を出して出演したのでしょう。

B　経営広報は今や会長秘書化していて、現場を知らなさすぎる。経営広報こそ現場と一緒になって動かないといけない。

C　クロ現の報道局社会部デスク、松井裕子氏は以前から子どもの虐待をテーマにしていただけに、忸怩たる思いを抱いて自分のこととして〝沈黙〟を捉えていた。

D　TBS**「報道特集」**は、J問題だけじゃなく、昨年から続けて旧統一教会を取り上げている。毎回2本の特集に光るものがある。

A　前会長の負の遺産は根が深く今も続く。10年以上は続いていたNHKの**「地域ドラマ」**が無くなって、ある地域ドラマのコンペに出来の悪い作品を一つしか出品してこなかった。名古屋局もドラマが撤退したまま。

ラジオも第2は今年度限り。8Kのチームは無くなり、技術者たちは今さ迷っている。

効率優先のシフトを、新しい会長の下で回復して行かねばならない。来年も再来年も、我々はウオッチしつづける。

北海道の現状は？

A　NHKの方が講演に来て、「10年後、放送業界の放送は停止します。今のままで将来があるとは思ってはいけません」と言った。北海道の各放送局の将来に関して失望させる話だった。実際、会社として制作費は削られて、地方局がずっと続けている「個人プレー」で、小さな力だけど、やるべきことをやり続けてきた。

各局、ドキュメンタリーを制作し放送文化基金賞を受賞している。恒常的に作る場は持てないが、スペシャル枠で日常の仕事もしながらやっている。日テレはNNNドキュメント、テレ朝はテレメンタリー、フジテレビはノンフィクション。年に1回か2回、企画を出して精査されて、制作される。

B　NHK北海道制作の**「北海道兵、一〇八〇五人の死」**は、北海道の通信兵が沖縄ですずらんを植えた、という話から、若いディレクターが足を使って調査報道をした番組。昭和から令和平成まで、各々の時代の人たちが、沖縄戦と戦争をどう伝えていくのかを、ドラマ的手法も使った熱がある作品で、放送人の会グランプリに推薦したい。

C　バラエティーは観光寄りで地方活性化をテーマに作っているので、みな同じ色で、個性的な番組は無い。

九州の現状は？

D　8月の終戦特集は九州では全くありませんでした。水俣病報道も同じ惨状です。

5月1日が「公式確認の日」(1956年5月1日水俣病が公式に認められた)で、「水俣病犠牲者慰霊式」の式典だけは放送されますが、付随した関連の放送は見られなくなりました。

A　制作環境が極めて悪くなっている。後輩の入社30年の制作者が愚痴をこぼすには、「この夏のボーナスが30年前と同じ額だった！」と。今ローカルで目立つのは、アポなしグルメの番組ばかりです。手短にお金を掛けない企画だから。

B　ローカル放送でもデーターの改ざんがあった。鹿児島の読売テレビ**「カゴピタ」**(2月23日放送)で、新タマネギと普通のタマネギの糖度を比較する企画で、計測したデーターを改ざんしたことが内部で問題になり、HPで「不正確、不適切な計測」と公表し、3月31日の放送で訂正した。

6月、南日本新聞の取材で「意図的に操作した」ことが明るみに出た。九州ローカルで、こんな不正行為は聞いたことがない。

C　大いに誉めたい企画が2つ！　FBS福岡放送の**「地元けんしょうバラエティー福岡くん」**は、地元の疑問を視聴者が投稿して、番組スタッフが調べるというもの。『福岡県民以外は1ミリも面白くない、少しだけ。噂のバラエティー』とあるが、私が面白く見たのを紹介する。

『福岡くん。的ガチ検証　絶滅危惧　博多弁SP』3千人アンケート(2022年12月11日12:35～)。アンケートで、ワーストワンになったのは「ばってん」。博多を代表すると全国的に思われている博多弁が、全く使われていなかったことを、面白く伝えていました。

アナ：伊藤舞、司会：斎藤優、ゲスト：田中健二。

D　大いに誉めたい、もう一つは、RKB毎日放送制作の**映画「シーナ&ロケッツ　鮎川誠と家族が見た夢」**(D：寺井到、P：緒方寛治、坂井博行)が8月25日全国公開された。鮎川誠さんの追悼番組で2月13日に放送したものを映画化した。出てくる人物がみな格好いい、イキイキしたドキュメンタリー。

会員の皆さん、どうぞご覧下さい！

終戦特集について

A　BS1とETV特集のコラボが2つ、良い試みだ。**「ミッドウエー海戦」**と**「テニアン島・サイパン島」**。ミッドウエーに拘る澤地久枝さんと澤地さんに拘る右田千代さん。テニアンからサイパンに拘る太田直子さん。3人の女性のこだわりで、戦争を見つづけてきた番組はパワーがあって感動をもたらす。今年の終戦特集の秀美である。

B　前編の「テニアン島」は2年前の夏の放送、ATP賞テレビグランプリを受賞。「サイパン島」は30年取材を続けて語られなかった真実がようやく明かされる。NHKの良いところは、太田さんのような外部制作を幅広く受け入れることだ。

C　しかも今回は、BS1後編50分がETV特集60分へと10分増し。この試みは良い。BSが2波あるからこその編成の妙だが、これも無くなるのか…。

D　女性の活躍で言えば、会員の中崎清栄さんと辻本昌平さん、名コンビの作品**「森本商店街一座～小さな町の心意気～」**。金沢の町の庶民の気持ちと人生に拘って、お二人は作り続けています。

高精細化&カラー化

A　関東大震災の映像の訴求力は、高精細化によるカラー化映像で何次元も上に登った。

B　国立アーカイブスが収蔵していた35㎜フィルムを8Kで高精細化して、映像をカラー化すると、人の動きや表情が見えて、火の熱さが分かるようになる。

C　それから、場所と時刻の特定していく。これは大変な作業で、ワンカットずつ先生方が特定していく。看板などの文字が読めて場所が分かる。我々の時代では出来なかったことだ。

D　10年前に8Kの映像に色を付けるという試みを始めたのが、寺園慎一氏で**「映像の世紀」**だった、それが放送史に記録すべき技術として実を結んだものといえる。

A　白黒のフィルムが資料として格段に深い新たな資料になる。受信料で出来た「高精細カラー映像」の新資料を共有財産にして広く利用して貰う制度にして欲しい。

B　関東大震災と言えば火災。火災の実証実験が2つあった。地震で瓦がズレて杉皮が露出し火の粉がついてフラッシュオーバー、いっそう火の粉が舞う。それを実験で確かめる。しかも大掛かりだから説得力が増す。

C　もうひとつは、陸軍被服廠跡の巨大な火災旋風の発生メカニズムの実験。4万人のうち3万8千人が死んだ理由を解き明かす。それこそが、ドキュメンタリーの手法だった。

D　これは、「映像の世紀のチーム」と「サイエンスのチーム」が合体した番組スタッフの力です。

4本を繋げて見れば

A　9月2日・3日の**「映像記録　関東大震災　帝都の三日間」**の前後編のあとに、9月4日の映像の世紀バタフライエフェクト**「関東大震災　復興から太平洋戦争への18年」**を3本連続して見ると、大震災を利用して、太平洋戦争に突っ込んでいったことが、よく分かる。

B　もう1本ある。6日のBS1**「竹久夢二の関東大震災～100年前の震災スケッチ～」**も個人史を通じて、震災から戦争の時代に向かっていく、心の軌跡を描いた。画家と言うよりも文化人の近代思想の系譜が分かる。この4部作を見ると、「今は戦前の始まり」と言う言葉が真に迫って来るようだ。

C　**「映像の世紀バタフライエフェクト」**が2年目に入ったが、レベルが落ちない、これはNHKの良い伝統だから、しっかり受け継いで行って欲しい。

D　一九九五年、河本哲也氏（80）から始まった「映像の世紀」、2年後には30年になる。もはや「映像の世紀」は古典。二〇一五年の「新・映像の世紀」から寺園氏（65）は制作に加わって、今や「～バタフライエフェクト」には欠かせない。定年からフリーの節目に、放送人の会として褒め称えたい。

新山賢治さん

アーカイブを見つめ直す

A　エゴドキュメントの第3回**「新・ドキュメント太平洋戦争　1943国家総動員の真実」**。一二〇〇人ぐらいの手記を集めて、AIで手記を分析して、平成生まれのディレクターが、手記を持っていた遺族を取材して、彼らなりに時代と人の心を理解しようとする。また、横長の画面に色々な工夫が凝らされていて、我々の時代に比べてより肉薄した記録が描けている。

B　太田直子さんのような個人のこだわり。もう一つは、NHKの組織がないと出来ないアーカイブスを利用したもの、これは車の両輪であって欲しい。

前川英樹さん

戦争関連のドラマは2つ

A　日付順で言うと**「軍港の子～よこすかクリーニング1946～」「アナウンサーたちの戦争」**。子どもに心が動いた。8月14日に、なぜ「和田信賢物語」を見なきゃならんのか？ニッポンホウソウキョウカイの戦争責任は何処に行った！

B　「軍港～」は、子どもより松岡茉優が良かった。クリーニング屋の話があっさり終わって拍子抜けだった。「アナウンサーたち～」はラスト、子どもが大本営発表を読むシーンが良かった。

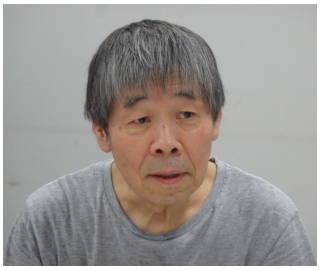
C　辛口で言えば、終戦特集ドラマを放送したとは言えないが、民放は全滅だから、まだ、いいか…。

D　ニュースではカーキ色の大統領が演説し、戦場の映像を日々目にする。だが、日本が起こした戦争が遠くなったからか、制作者たちの頭から戦争は離れてしまったのだろうか？

A　でも、戦後はもうちょっと近いから、マッカーサーやGHQの話、戦後民主主義がなんで後退したか、ドラマ化してほしいが、それをやれる作家も演出家もいないというのは寂しいな。

B　**ファミリーヒストリー「草刈正雄」**が傑作だった。駐留米兵の父に会いたい…これはドラマ化したい！

C：竹久夢二も、ぜひ、ドラマ化してほしい！



司会編集・菅野高至

上半期のドキュメンタリーから

A　今野勉さんの**「業の花びら　～宮沢賢治父と子の秘史～」**。賢治と保阪嘉内のホモセクシャル、跡を継がない子と父の和解。いつになくシンプルな傑作。

B　日曜朝の5時。早起きの老人にはありがたい番組（笑い）**「こころの時代　宗教と人生」**が良い。宗教とカルトの問題を、徹底討論シリーズの第5回～第7回の3本を放送。制作統括の鎌倉英也氏の頑張りを称えたい。ただし、ながら視聴では絶対分からない。

C　**「はだしのゲン」と父　翻訳者・坂東弘美」**も良かった、地味だが深い終戦特集の傑作です。

D　世界の被爆者を写真に撮り続けたフォトジャーナリスト・豊崎博光の話「**見えない痛みを託されて**（略）」も良かった。

渡辺紘史さん

A　E特の「**誰のための司法か～團藤重光～**（略）～」が内外で評判が良い。戦前的な教養人の典型で、こういう人たちが日本人の有り様に、常に目を光らせていたとのだとよく分かる番組だった。

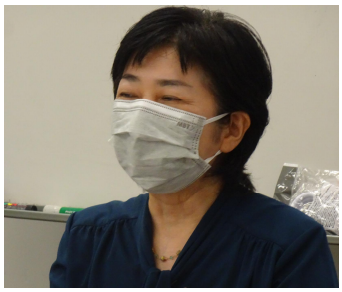
Nスペか、E特か

B　ETV特集とNHKスペシャルの棲み分けはどう考えているのか？

吉田賢策さん

C　属人的なもの。Nスペの試写では、あっちからこっちから色々言われる。試写の煩さから考えると、不特定多数が相手の表通りの店よりも、路地裏にひっそり構えた狭い店に、特定少数の通人がかよって「今日もいいもの置いているじゃないか」と言われるのも捨てがたいのだ。

D　願わくは、E特に逃げ込まないでほしい。



岡室美奈子さん

上半期のドラマ、推しは？

A　WOWOWの「FENCE」が素晴らしかった。野木亜紀子脚本。これまで私が見た限りの沖縄を取り上げたドラマでは秀逸でした。過去から現在まで「沖縄の問題」が続いているのがよく分かる。米兵だと思っていたレイプ犯が日本人（内地の人）だと分かるのと、沖縄戦で日本人の兵士が住民を虐殺したことと重ね合わせて描いていく。

B　脚本家・野木亜紀子、演出・松本佳奈、制作・北野拓（NEP）が沖縄の現実と格闘している。その気迫が作品に結実している。被害者加害者、日本対アメリカの二元論では無く、深いところを突いている。

C　問題は、NHKは、なぜこの企画を採用しなかったのかだ。

D　だから、NHKドラマは死んだと言うんです。かつては、社会派ドラマをちゃんと放送していたのに…悲しい。

A：社会派は、今やWOWOWとNetflix。WOWOWでは井上由美子脚本の「**フィクサー**」全5話を3シリーズで全15本。キャストが豪華です。井上由美子らしいエンターテインメント風社会派ドラマに仕上がっている。第3シリーズは10月から。

B　Netflixの「THE DAY」。福島第一原発事故の発生から安定までを、50分の全8回で描く。岡田所長を演じた役所広司が主役。企画脚本プロデュースの増本淳氏はフジテレビのディレクターを辞めて作った。熱い志が画面から迫って来る。

C　NHKの土曜ドラマ「やさしい猫」は演出の柳川強らしい、優しい作品。改正入管法で在留資格の無い『非正規滞在者』を家族に迎えるまでの物語だが、ハッピーエンドで、問題を安易に見せてしまうのでは、との意見も。

深尾隆一さん

どうする！大河、どうする？

D　楽しくないので、可哀相なくらい評判が出ない。歴史の常識をあり得ないほど変えないでほしい。築山殿に有村架純をキャスティングした結果、歴史から離れたようだ。

　平和主義を掲げて部下も一緒に戦争より平和と言ってたのが、女の死で信長暗殺に一気に傾く！？

A　才子才に溺れる、空回りの作品。作家の古沢良太、制作の磯智明、2人に期待したのだが、最初の構成からおかしかった。新機軸と考えたのか、主役の家康をさし置いて、一回一回、その回の主役を決めてストーリーが展開する。しかも子ども時代と大人を行ったり来たりする。

B　必要の無い殺し合い、合戦シーンが多い、しかも真っ暗でよく見えない…。演出の加藤拓の好みらしい。

C　J問題が起こったときの大河にふさわしい大河で、「信長と家康のJ風ボーイズ・ラブ」を描いた…では洒落にならない。岡田准一の信長にお稚児さん扱いされていた松本潤の家康、稚児のトラウマが爆発、信長を殺そうとする…。

D　古沢さん、明智や秀吉を本当に愛して描いていますか？

川渕惠子さん

「らんまん」は大喝采！

A：史実にヒントを貰っているが、牧野富太郎を描くものではない、作者のスタンスが明確だ。牧野の研究者も、みなドラマに教えられることがあるという。牧野はこんな風に考えたかもしれない、と。

B：史実を変えているが、納得できるのは作家の力量です。中村万次郎に会ったとか。東大に対する考え方。要潤もちゃんと最後に掬って、登場人物の一人一人を、ちゃんと愛していとおしく描いている。

ドラマ・アラカルト

C：テレ東作品「**初恋、ざらり**」に填まっている。軽度知的障害がある女性の不器用な恋。役者・小野花梨が巧い！

D　「**最高の教師**」私、大好きです。

A　**「転職の魔王様」「シッコウ!!～犬と私と執行官～」**。転職エージェント、裁判所の執行官など、新しい職業が登場した。

B　**「日曜の夜ぐらいは」**のような癒やし系のドラマが支持されている。脚本の岡田惠和には「彼女たちの時代」があって、それの現代版なのだが、主人公は最早戦わない。ファンタジーで始まってファンタジーで終わる、令和だなと思いました。

C　**「この素晴らしき世界」**の若村麻由美さんが良かった！　最終回がJ事務所と重なりました・・・。脚本の烏丸マル太はPの鈴木吉弘のペンネームです。

D　最近、NHKで出演者の被りが多すぎる。昔は編成がハンドリングしていたけど、今は無法地帯だ。大河や朝ドラの主演者が「鶴瓶の家族に乾杯」に出たり、「英雄たちの選択」で家康スペシャル2Hをやったり、NHKは番宣ばかりの23年1月だった。

石橋映里さん

「VIVAN」を解体する

A　まるでジェットコースターのような展開、意外性につぐ意外性で、見ている間は確かに面白い、ただそれだけで、何も残らない。しみじみとした深い感動や、人間の悲しさや、人間の素敵さなどの感慨にはひたれない。

B　何処かで見たようなシーンをパッチワークのように繋ぎ合わせて、クリエイティブな要素はどこにあるのだろうか。

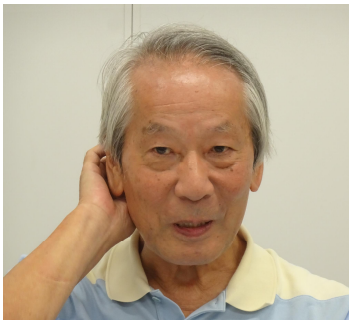
C　「VIVAN」は新しくは無い。「24 TWENTY FOUR」方式に似ています。ジェットコースターのような展開で、内部の裏切りがあって、拷問だとか、あざとい見せ方がそっくりなんです。

（※「24」FOX、2001年～シーズン1～シーズン8。日本は2004年～放送）

D　かつてTBSには多彩なドラマがあった。作家性の優れたドラマを作ってきた。今は、対抗軸がなくなって、みな福沢流の作りになっている。エンタメでなければドラマにあらず、福沢克雄症候群にかかっている。

A　ドラマを放送で見ながら、スマホ片手に何処に伏線を置いたのか、それがどこで回収されるのか、SNSで感想を述べ合う。放送で見ていないと、話題に入って行けず、配信では取り残されてしまう・・・。

SNS頼りの企画がドラマをヒットに導いたようだが、果たして、これがテレビの復権につながるのだろうか。



鈴木嘉一さん

B　本来、エンタメは手段方法であったのにエンタメ自体が目的になっている。この発想は危険です。日本のドラマがアメリカ化、或いは韓国化している。作家を複数集めて集団で作る。もともと作家性を期待しないで、マーケッティングで面白いもの作って視聴率を稼ぐ。

C　エンターテインメント自体は否定しないが、あとあとまで残るドラマはあるんです。山田太一さんの「異人たちの夏」という小説は、88年に市川森一脚本、大林宣彦監督で映画化されました。今年、英米合作で、映画化が進んでいます。アンドリュー・ヘイ監督、アンドリュー・スコット主演で、配給ディズニー、24年春公開予定。人の心に訴える作品は、海を越えていく魅力を持つんです。

三原治氏さん

ラジオの出番です！

A　8月の6日9日15日にあわせて、民放NHKの終戦特集がありました。そのうちの5本を紹介したい。

・8月6日、中国放送のラジオドキュメンタリー**「少女たちの公式～声なき声をたずねて～」**　慰霊碑に原爆製造の公式があることをきっかけに、六六六人の生徒が犠牲になった市立第一高女の関係者を訪ねて歩く

・8月9日、長崎放送**「平和の日ラジオ」**。日常のワイド番組の放送の中で、特番化して「長崎平和記念式典」を聞かせる工夫とその構成は秀逸だった。

・8月6日、NHKR1**「ヒロシマを継ぐ～若き伝承者の思い」**　34歳の沖本春樹さんは伝承者の資格を取って、次の世代へ体験をつないでいこうする。ラジオドキュメンタリー。

・8月14日（月）～18日（金）NHKR1**「終戦から78年　Z世代が伝える戦争のはなし」**　20代のZ世代の人々にインタビューして、15分のドキュメンタリーを5本作っている。15分なので、聞き易く良く出来ている。評価が高い。

・8月3日、文化放送**「民放ラジオの黎明～Count Basie（カウント・ベイシー）が聞こえる」**　戦後、アメリカがいかに日本にジャズを広めて、親米意識を日本人に植え付けようとしたかを解き明かしていく。アーサービナードが語ると説得力がある。

B　身になる**『ラジオ第2』**の番組を3つ。皮肉を込めて、今年のラジオグランプリには、ラジオ第2推薦したい（笑い）。

・**「芸術その魅力」**水曜・20:30～21:00。

・**「音で訪ねるニッポン時空旅」**土曜・9:30～10:00。

・**「日曜カルチャー」**日曜・20:00～21:00。

ぜひ、皆さん、聞いて下さい。

～　～　～　～

座談会欠第

日時：9月16日(土)14時～17時

場所：テレビマンユニオン　02会議室

出席：石橋映里、岡室美奈子、川渕惠子、新山賢治、鈴木嘉一、深尾隆一、前川英樹、三原治、吉田賢策、渡辺紘史、

オンライン出席：林健嗣、村上雅通、書面参加：鈴木典之、小川和之、牧之瀬惠子

司会&記録：菅野高至、

オンライン調整：深尾隆一

2023/09/26：菅野記

2023 年度・上期放送メモ～終戦特集～

※人名等の誤記入を謝謝！

６月 10 日 23:00～、59 分、ＮＨＫＥテレ、第１部。　６月 19 日 23:00～、59 分、ＮＨＫＥテレ、第２部。

ETV特集「ミッドウエー海戦　3418人の命を悼む」　第１部 『命の重さ』

澤地久枝（92）が徹底取材の「ミッドウエー海戦」の調査資料（段ボール 18 箱）を読み解き、遺族の現在を訪ね歩いて「戦死」の現代的意味を問う。語り：守本奈美、取材：田中教仁、リサーチャー：板垣孝太郎、Ｄ：右田千代、亀谷住人、制作統括：夜久恭裕、東野真、梅原勇樹。制作著作：ＮＨＫ

第２部 『残された者たちの戦後』

米兵の犠牲者 362 人を辿る。戦死者の子の戦死（ベトナム戦争）、反戦運動に身を投じた駆逐艦の元艦長。捕虜となり殺害された兵士の遺族…。語り：守本奈美、朗読：山根基世、原康義、以下、第１部と同じ。

※関連⇒⇒８月 27 日（土）21:50～、60 分枠、ＮＨＫＢＳ1　**「"異形の死"と向き合い続けて　ミッドウエー海戦　3418人の命を悼む」**

６月放送の、戦死者の遺族の 81 年に迫る。６月５日、佐世保で空母「加賀」の慰霊祭と墓参。遺族 38 人に接触し、28 人が取材に応えた。

△語り：守本奈美、朗読：山根基世ほか、Ｄ：右田千代、田中教仁、制作統括：夜久恭裕、制作著作：ＮＨＫ

△上記３作品は 92 歳の澤地さんの遺言である。

６月 23 日（金）18:10～、25 分枠、ＮＨＫＧ　**The Life「"平和のバトン"託し続けて～元学徒・中山きくさんの生涯～」**

沖縄戦で負傷兵の看護に動員された元白梅学徒・中山きくが１月に 94 歳で亡くなった。戦後“語り部”として次世代に「平和のバトン」を託し続けた生涯に迫る。△ナレ：津波信一、撮影：市川可奈子、音声：山内淳子、Ｄ：岡田ゆり、制作統括：阿部浩一、制作著作：ＮＨＫ沖縄

６月 24 日（土）23:00～、59 分、ＮＨＫＥテレ　**ETV特集「置き去りにされた子供たち　沖縄　戦争孤児の戦後」**

△米軍に収容された戦争孤児は、終戦後、孤児院が閉鎖され、働き手を求める家庭に引き取られるなど、苦難の人生を強いられる。80 代の今も、自分の本当の名前が分からず、出自を探す。生き別れた妹や弟の消息を追い続ける。過酷な人生のＰＴＳＤに苦しむ･･･。△時代と国家、社会に置き去りにされた人々の記録。番組ラストの尋ね人の告知「〇〇を探しています」が切ない。

△取材：野崎忍、リサーチャー：藤岡ひかり、Ｄ：伊藤亜由美、Ｐ：伊藤純、Ｄ：伊藤亜由美、取材協力者：28 人の個人名、制作統括：太田宏一、東野真、制作：ＮＥＰ、制作著作：ＮＨＫ

６月 25 日（日）21:00～、54 分、ＮＨＫＧ　**NHKスペシャル「"戦い、そして、死んでいく"～沖縄戦　発掘された米軍録音記録～」**

『海兵隊戦闘記録』インタビューと実況は「ラジオ通信兵」のスタンリー軍曹。1945 年３月～７月４日まで、30 時間の録音記録はあらゆる地獄を集めた戦場を伝える。△語り：高橋美鈴、Ｄ：三宅佑治、小林宏太郎、制作統括：生田寛、小池幸太郎、制作著作：ＮＨＫ沖縄

７月１日（土）4:50～、30 分枠、メーテレ　**テレメンタリー2023「ゲンは忘れない～"50 年後"の広島で～」**

原爆の実相を描く漫画「はだしのゲン」は連載から 50 年、24 の言語に翻訳されている。翻訳者たちが広島のＧ７サミットをどのような思いで見つめたのかを取材。△ナレ：石上愛子、Ｄ：堀雅司、Ｐ：村瀬史憲、制作著作：名古屋テレビ放送。

８月２日（水）19:30～、26 分　ＮＨＫＧ　**クローズアップ現代「『はだしのゲン』はなぜ消えた？」**

広島の平和教育教材の差し替え、その経緯を探る。教育委員会に働きかけた自民党議員（日本会議）。改訂の責任者は聞いていない、とプロセスは不透明。キャスター：桑子真帆、報告：石川拳太朗（NHK広島）、ゲスト：草原和義（広島大学教授）

８月５日（土）4:30～　30 分枠　テレビ朝日　**テレメンタリー「彷徨い続ける同胞」**

戦後 78 年捨てられた日本人、棄民は 90 歳となり、「今、最後の助けを待っている」。フィリピンの無国籍２世たちの実態を伝えるルポ。

△ナレ：久保田直子、撮影：那須雅人、デスク：ルワング瑤子、Ｄ：松本健吾、演出・Ｐ：浦本勲、総合Ｐ：須田光樹、制作著作：ＴＶ朝日

８月６日（日）5:00～　60 分　Ｅテレ　**こころの時代「見えない痛みを託されて　フォトジャーナリスト　豊崎博光」**

豊崎博光（75）世界の被爆者（核実験場、ウラン採掘場）の写真を撮り続けてきた人生を辿る。

△語り：加賀美幸子、取材：浅井靖子、撮影：角文夫、Ｄ：奥秋聡、制作統括：川添哲也、制作著作：ＮＨＫ。

８月６日（日）24:55～、30 分枠、日本テレビ　**NNNドキュメント 23「伝承の期限　どうつなぐ？　ヒロシマの記憶」**

井上つぐみ（23, 広島大学医学部）が被爆体験を伝える伝承者研修に参加。その記録。△証言者の川本省三が亡くなり失格になるが･･･。
△ナレ：潘めぐみ、撮影：鉄森利実、津堅厚一、Ｄ：金丸真帆、Ｐ：道閑慎一、制作著作：広テレ

８月７日（月）22:00～、59 分、ＮＨＫＧ　**NHKスペシャル「発見 昭和天皇御進講メモ～戦時下知られざる外交戦～」**
宮内省御用掛･松田道一の「御進講メモ」。松田は最後の英米協調派。△1933 年～12 年間、情報関係のスタッフ不在の天皇には、唯一の情報源で、現実と願望を取り違えた。△メモの言葉をＡＩで分析。外交史･佐藤元英、現代史･吉田裕, 加藤陽子, 古川隆久、バチカン現代史ほか。△語り：広瀬修子、出演：片岡孝太郎、長塚京三、再現演出：佐古純一郎、取材：吉見直人、Ｄ：小林亮夫、岡田享、制作統括：塩田純、梅原勇樹

８月９日（水）20:00～、20:50～21:39　ＮＨＫＢＳ1　**BS1 スペシャル「“玉砕”の島　語られなかった真実」**
『前編 テニアン島』(再放送)　『後編 サイパン島』
前編は２年前のＥＴＶ特集「“玉砕”の島を生きて～テニアン島・日本人移民の記録」を 50 分に再編集。
後編は新作。サイパン島の日本人、先住民（チャロモ、カロリニアン）の証言。△自らカメラを回す太田直子Ｄの取材 30 年の集大成。
△資料提供･取材協力：今泉裕美子、コーディネーター：ジェシカ･トモカネ、取材：米原直人、野村真衣菜、撮影：高岩仁、大久保千津奈、語り･撮影･Ｄ：太田直子、制作統括：東野真、太田宏一（ＮＥＰ）、田野稔（グループ現代）、制作：ＮＥＰ、制作著作：ＮＨＫ、グループ現代

※⇒⇒８月 26 日（土）23:00～、59 分、ＮＨＫＥテレ、　上記『後編』の完全版（10 分増量）
ETV特集「“玉砕”の島を生きて (2) ～サイパン島 語られなかった真実～」
民間人２万人が地上戦に巻き込まれた〝玉砕の島〟の真実を探る･･･。△母と姉弟６人は身を投げ、ひとり逃げて家を絶やすな。△マッピの岬。日本兵が指揮を執り、一家は父が咽を切り、妹の首が飛んで、子らを撃ち殺し、青酸カリで自決。△先住民のチャモロは５人に１人が犠牲に。国の無い民族は洞窟の中で、飢えや渇きのため「涙まで呑んだ」。△「～取材続け 30 年、託された責任の重さを強く感じている。」

８月９日（水）22:00～、45 分　ＮＨＫＧ　**歴史探偵「消えた原爆ニュース　報じられなかった広島長崎」**
被害の真実はなぜ隠され、どのように明らかにされたか。△終戦から１カ月後、マッカーサー（ＧＨＱ）は原爆報道を統制。核兵器開発を続ける米国は自国民に原爆の残虐性を隠したかった。△検閲は３年で終わるが、自主規制が続く。△1951 年、「知ったからには未来のために伝える責任がある」と、京大学生たちが「原爆展」開催。７月、３万人を集める。△司会：佐藤二朗、渡邊佐和子、出演：河合敦史（現代史）、リポーター：近田雄一、ドラマ演出：中川浩三、Ｄ：中智純、Ｐ：中島康仁、制作統括：高木秀也、制作著作：ＮＨＫ大阪

８月 10 日（木）22:00～、73 分　ＮＨＫＧ　**特集ドラマ「軍港の子～よこすかクリーニング 1946～」**
△横須賀、戦争孤児たちがクリーニングの仕事に出会い、人に感謝されて生きる喜びを知る。△原作：西田彩夏、脚本：大森寿美男、Ｄ：田島彰洋、制作統括：桑野智宏、制作著作：ＮＨＫ、△出演：小林優仁、高橋來、村山輝星、原田とら之佑、仲野太賀、松岡茉優、田中麗奈、

８月 11 日（金）22:15～、45 分　ＮＨＫＧ･北海道のみ　**北海道スペシャル「北海道兵、10805 人の死」**
沖縄戦で 10, 805 人の北海道兵が戦死。彼らは“戦闘員”ではなく“支援部隊”なのだが、小銃や手榴弾を持たされ死んでいった。取材の始まりは「若き〝通信兵〟の死　すずらんの兵士を探して」という投稿。戦後 78 年、消えつつある記憶の断片を沖縄と北海道で掬い集める。通信兵とは、すずらんとは･･･。（番組取材班　国分拓ディレクター）

８月 12 日（土）18:00～　89 分　ＮＨＫＢＳＰ　**「戦争遺産島　～空から迫る日本の島々の軍事施設～」**
島々に残る戦争遺跡をドローンで撮影、記録の朗読、人々は何を思い、どう生きたか？　△奄美群島、広島市似島、山口県周南市大津島、東京湾･横須賀市猿島　△朗読：梶裕貴、語り：守本奈美、構成：金丸純也、資料考証：大森洋平、取材：西田修、藤倉健太郎、高橋康弘、海藤良、Ｄ：花田憲明、制作統括：武中千里、矢野洋平、小川隆蔵、制作：ＮＥＰ、制作著作：ＮＨＫ、ローリング、

８月 12 日（土）22:00～　50 分　ＮＨＫＧ・前編　８月 13 日（日）22:00～　50 分　ＮＨＫＧ・後編
大型シリーズ企画･エゴドキュメント（個人の日記, 手記）の第３回（３年目）一人一人のこころの変遷に迫る。
NHKスペシャル「新･ドキュメント太平洋戦争 1943 国家総動員の真実」
戦死者が増加する中、若者や子供が戦力として国家総力戦の渦に巻き込まれていく 1943 年を描く。
【前編】戦場では「愛する妻よ、さようなら」と遺書を残し米軍に突撃。全滅が「玉砕」と美化され、「あとに続け」と十代の若者たちが戦場へ
△語り：伊藤敏恵、取材：吉見直人、宮智麻里、Ｄ：小川海緒、村山世奈、水嶋大悟、制作統括：横井秀信、山崎啓明、制作著作：ＮＨＫ。
【後編】際限なき戦争動員が市民の暮らしを一変させ、若者や子どもが戦争に巻き込まれていく。△海軍は「予科練の募集」を強化し、国からノルマが課せられ、学校間の志願競争となり、中学生ら３万人が応募。秋には学徒出陣。△この国の未来を背負う若者たちの命が失われた。

△語り：伊藤敏恵、取材：大貫陽、Ｄ：夫馬直実、長野玲英、酒井邦博、水嶋大悟、制作統括：横井秀信、山崎啓明、制作著作：ＮＨＫ。

８月 13 日（日）24:55～　30 分枠　山形放送　**NNNドキュメント 23「でくのぼう～戦争とPTSD～」**
武蔵村山市の「ＰＴＳＤの日本兵と家族の交流館」。でくのぼうの父は、心を壊された兵士だった。奪われた家族の時間、今なお苦しむ遺族たち。心の傷は世代を超える。△ナレ：二又一成、Ｄ&撮影編集：伊藤翼、Ｐ：結城義則、制作著作：山形放送

８月 13 日（日）24:58～、60 分枠　ＴＢＳ　**ドキュメンタリー解放区「つなぐ　つながる『毒ガス島の記録』」**
大久野島、毒ガスの製造で地図から消された島。小松玲菜記者（26）が祖母の姉･岡本須磨子（92）が学徒動員で働いていた島を尋ねるルポ。△ＴＢＳDOCS、ナレ：小松玲菜、撮影：鐘ヶ江尚徳ほか６名、Ｐ：岸慶太郎、Ｄ：小松玲菜、立山芽衣子、制作著作：ＴＢＳ

８月 14 日（月）19:30～、75 分、ＮＨＫＧ　**「ファミリーヒストリー　『草刈正雄』」**
草刈正雄（70）は 70 年ぶりに見知らぬ父の消息を知る。これこそ、終戦特集番組。△2010 年に死んだ母スエには、駐留米兵の父は朝鮮戦争で死んだと聞かされていた。写真も全部焼いた。△父ロバート・トーラーは福岡でスエに出会い、出産前に本国へ転属。1952 年９月正雄は婚外子となる。△トーラーは軍人の家系ゆえに、敵国日本人の子供が出来たことを言えずに悩む。△53 年、再起を期して空軍の仕事で西ドイツへ。ヘルガと結婚。△トーラーの実家に、スエの手紙が届き、姉ジャニタらは初めて、弟に日本人との子供いることを知る。△ジャニタ（97）は「私は若く、お金もなかった。（草刈）親子の無事を祈るしかなかった･･･」。△スエはロバート宛に「アメリカに行く」と手紙を書くが、姉らが拒否して、スエは正雄に「父は死んだ」と伝えた。△高齢になって、ジャニタは息子に打ち明けた。△トーラーは 2013 年 83 歳で亡くなる。△23 年７月末、草刈はノースカロライナで叔母のジャニタに会う。ジャニタは笑顔で「イッツ・ミラクル！　私にそっくり！」と出迎えて、抱擁･･･。△出演：草刈正雄、司会：寺門亜衣子アナ、語り：余貴美子、取材：竹内美穂、鮫島詩織莉、今井こうき、新井久美子、Ｄ：宗像竜大、制作統括：赤上亮、横山友彦、制作協力：東京サウンド・プロダクション、制作：ＮＥＰ、制作著作：ＮＨＫ。☆ドラマ化したい！☆

８月 14 日（月）22:00～、90 分枠、ＮＨＫＧ　**NHKスペシャル「アナウンサーたちの戦争」**
戦争中の日本放送協会とアナウンサーたちの「電波戦」。事実をもとにドラマ化。△脚本：倉光泰子、脚本協力：山下澄人、Ｐ：菊江賢治、幸清志郎、城谷厚司、Ｄ：網秀一郎、大久保圭祐、制作統括：新延明、演出：一木正恵、制作著作：ＮＨＫ、
出演：森田剛、橋本愛、高良健吾他

８月 15 日（火）19:30～、72 分、ＮＨＫＧ　**NHKスペシャル「Z世代と "戦争„」**
終戦の日。Ｚ世代が“戦争”をテーマに本音で議論。高校生･大学生･ドキュメンタリー作家･元自衛官など 12 人。△キャスター：青井実アナ、中山果南アナ、出演：みりちゃむ、パックン、保阪正康、長有紀枝（立教大教授）、小泉悠（東大専任講師）、ノヴィッカ･カテリーナ（ＮＨＫ国際放送局ディレクター･ウクライナ人･27 歳）、語り：梶裕貴　△戦争を伝えるＮスペ番組の宣伝、オンデマンドの宣伝。

８月 19 日（土）4:50～、30 分枠、テレビ朝日　**テレメンタリー2023「踏まれても　踏まれても　～ゲンと子どもたちの半世紀～」**
「ゲン」はどのように読み継がれてきたのか。50 年目の現在地を、子どもたち、教育現場、妻の中沢ミサヨ（80）から探る。
△ナレ：上白石萌音、撮影･編集：熊田好洋、撮影：吉田真智、蔵野大輔、Ｄ：法野未佐、Ｐ：立川直樹、制作著作：広島ホームテレビ。

８月 19 日（土）23:00～、59 分、ＮＨＫＥテレ　**ETV特集「チェーサーが終わる日　―在日コリアン 世代を超える葛藤―」**
創立 76 年の大阪朝鮮第四初級学校、通称〝チェーサー〟が３月 23 日の修了式で閉校となる。その日々を追う。△日本社会で生きる若い世代の本音とチェーサーと共に生きてきた人たちの本音。△語り：南果歩、撮影：日昔吉那、Ｄ：横里征二郎、制作統括：高比良健吾、梅原勇樹、制作著作：ＮＨＫ大阪、　△これも、終戦特集の作品です。

８月 20 日（日）5:00～、59 分枠、ＮＨＫＥテレ　**こころの時代 宗教と人生「『はだしのゲン』と父　翻訳者･坂東弘美」**
「はだしのゲン」中国語版翻訳者･坂東弘美（76）の人生を辿る。△上海掃討戦で、父は女性･子ども･老人を殺す。「殺した人の命から出生！」私はどう生きるのか？　△99 年北京の中国語国際放送で働く。タイ人から「～ゲン」を教えられる。△記者の仲間を集めて翻訳を始める。△16 年台湾で出版。夢は中国での出版。△８月６日広島、無名戦士の碑「中沢ハルミ（ゲンの祖父）」。
△語り：三宅民夫、撮影：糸数康宏、増田裕二、Ｄ：吉岡礼美、Ｐ：井川陽子、制作統括：鎌倉英也。

８月 21 日（月）22:00～、44 分、ＮＨＫＧ　**映像の世紀バタフライエフェクト「GHQの6年8か月　マッカーサーの野望と挫折」**
厚木上陸から退任演説まで。東京オリンピックの年に、85 歳で亡くなり、国葬。△マッカーサーの占領史。△語り：糸井洋司、Ｄ：鈴木信博、Ｐ：政岡保宏、制作統括：寺園真一、久保健一、伊川義和、制作協力：アミューズ、制作：ＮＥＰ、制作著作：ＮＨＫ、

９月２日（土）22:00～、49 分、ＮＨＫＧ・前編　　９月３日（日）22:00～、49 分、ＮＨＫＧ・後編

ＮＨＫスペシャル「映像記録　関東大震災　帝都の三日間」

国立映画アーカイブに残る 20 本の記録映画。1923 年９月１日を数人のカメラマンが撮影。撮影場所と時間が不明。△５時間のモノクロフィルムを８Ｋで高精細化&カラー化。△建物の形、看板、影、人の表情が鮮明に。ワンカットずつ場所時間を特定。一級の歴史資料。△協力：廣井悠（都市防災）、岩見辰也（火災）、田中傑（都市史）。△映像を時系列で再現、証言音声の録音 166 時間（廣井悠の父･脩が聞き取る）を併せる。△語り：守本奈美、映像考証：田中傑、色彩復元：伊佐早さつき、リサーチ：藤岡ひかり、伊賀俊徳、取材：池上敦子、池田周平（前編）足立絵梨（後編）、Ｄ：後藤遷也、三木健太郎、Ｐ：伊川義和、制作統括：木村春奈、寺園慎一、中井暁彦、制作協力：ＮＥＰ、制作著：ＮＨＫ。

【前編】火事を最初は笑って見ている。火災の同時多発を知らない。△15 時, 風速 10㍍で火の粉～飛び火火災, 240 か所。△実験, 地震で瓦がズレて杉皮が露出し火の粉がつき、温度が上がってフラッシュオーバー, 上昇気流で火の粉が舞う。△16 時頃、50 万人が上野公園へ。多くは借家だから、大八車に家財道具で身動きが取れず混乱。△隅田川の橋、両側から押しかけ圧死、川に飛び込む、橋が燃える。黒澤明の自伝証言。

【後編】16 時頃、陸軍被服廠跡を巨大な火災旋風が襲う。△実験, 火災旋風の発生のメカニズム。風の流れの偏り。４万人のうち３万８千人が死亡。東京駅前広場 10 万人, 駅舎や列車。△２日目の恐怖。風向きが変わり火災が上野公園へ。11 時広小路が焼け野原。△不忍池の水で消火、上野　公園の 50 万人は無事。△３日まで燃え、東京の４割焼失。人々の心のすさみから＜流言浮説＞。戒厳令を敷く。△自警団の検問所, 朝鮮人が井戸に毒の流言。軍人警官がデマを信じて殺害。「ぼくたち」は朝鮮人と判断。231 人或いは数千人が殺された。△司法省の報告書「デマは認められない」△10 月 19 日被服廠跡で合同慰霊祭。死者 10 万５千人。△東大（地震学）今村明恒の悔い。「50 年間に地震が起きる」の予測が無視された。観測所を８か所設置。▲1930 年５月「奇跡の復興」を祝う。最後のナレ『100 年前に映る映像は明日の私たちかもしれない』。

９月４日（月）22:00～、ＮＨＫＧ　　**映像の世紀バタフライエフェクト「関東大震災　復興から太平洋戦争への 18 年」**

上記とこれと、３本まとめて見ると、よく分かる大日本帝国の野望。　　〝震災の奇跡〟が国家総動員体制に利用された！

△1923 年９月１日。神田佐久間町・泉町。神田川の水をバケツリレーで消火、震災の奇跡と賞賛され、災害訓練が空襲に立ち向かう手本となる。△防災から生まれたラジオや町内会は国家総動員体制の下支えとなる。戒厳令で軍が存在感を高める。△渋沢栄一「天譴（天罰）は自由を求める日本人への戒め」。△震災から２か月、天皇「国民精神再興に関する詔書」。～略～　1930 年帝都復興祭＝天皇巡幸。31 年満州事変。～略～　44 年　３月 10 日東京大空襲。10 万人死亡。神田佐久間町・泉町も焼失。△時代考証：中村紀、リサーチャー：藤岡ひかり、高澤圭子、取材：池上敦子、Ｄ：鹿島真人、Ｐ：山中賢一、田邊裕世、制作統括：久保健一、寺園慎一、制作著作：ＮＨＫ。

９月６日（水）20:00～、59 分枠、ＮＨＫＢＳＰ　　**英雄たちの選択「竹久夢二の関東大震災　～100 年前の震災スケッチ～」**

上記とこれと、４本まとめて見ると、もっと、よく分かる大日本帝国の野望。

新聞連載の「夢二の『震災スケッチ』」は、自ら見聞きした光景に文章をしたためたルポ。大災害に巻き込まれた人々の恐怖・悲嘆、あとにくる退廃を克明に描いた。△また、大震災は、夢二（1884～1934）の人生の大きな転機となる。美人画に限界を感じ、新たに暮らしに密着した美術研究所の設立を模索するも、アメリカ・ヨーロッパへと旅立つ･･･。△「震災スケッチ」を手がかりに、夢二が追い求めた世界を探る。△ナレ：松重豊、取材：橋脇ななみ、Ｄ：佐藤歩、Ｐ：菊池正浩、角田誠二、制作統括：増田秀樹、谷口雅一、制作：ＮＥＰ、制作協力：テレコ　ムスタッフ、制作著作：ＮＨＫ

～2023 年度上半期のドキュメンタリー･3月中旬―9 月中旬～

３月 24 日（金）23:00～、90 分　ＮＨＫＢＳＰ　　**没後 90 年特集「業の花びら　～宮沢賢治　父と子の秘史～」**

語り：森田美由紀、出演：中川光男、くらもちひろゆき、鹿野宗健、高村光葉、Ｄ：東考育、Ｄ・語り：今野勉、Ｐ：藤村恵子、制作統括：松永　眞一、小野正記、制作：ＮＥＰ、制作著作：ＮＨＫ、テレビマンユニオン、△賢治と保阪嘉内とのホモセクシャル、～父と子の和解。

３月 25 日（土）23:00～、59 分　Ｅテレ　　**ETV 特集「沖縄の夜を生きて　～基地の街と女性たち～」**

語り：上田早苗、撮影：門脇妙子、川崎哲也、川野健治、Ｄ：植田恵子、杉本美泉、制作統括：東野真、太田宏一、小柳ちひろ、制作：ＮＥＰ、制作著作：ＮＨＫ、テムジン　△戦後、コザの街に奄美や離島から働きに来た女たち。Ａサインバー、ベトナム戦争、米兵との混血。

４月２日（日）5:00～、59 分枠、ＮＨＫＥテレ　**こころの時代 宗教と人生「徹底討論 シリーズ Vol.5　問われる宗教と〝カルト〟」**

「『宗教の自由』と法規制」前編

△前のめりに急ぎすぎ。あまりにピンポイント。日本の政治の大きな欠点･応急処置・アリバイ作り･ガス抜きのために法律。△実際に適用を。△コミュニティが無くなり、むき出しの個人が社会と向き合い、孤立したむき出しの個人を「カルト」が精神的に支配する。

４月９日（日）5:00～、59 分枠、ＮＨＫＥテレ　　**こころの時代 宗教と人生「徹底討論 シリーズ Vol.6　問われる宗教と〝カルト〟」**

「『宗教の自由』と法規制」後編

△フランスの「セクト規制法」。「信教の自由」：アメリカはマイノリティ宗教団体を守る、日本は今も国家統治のために宗教を使う。△宗教と国家と家族が未分化な社会の中で、孤立した女性が取り込まれる。△出演：弁護士・金塚彩子、憲法学者・駒村圭吾、宗教学者・島薗進、牧師/宗教学者・小原克博、宗教学者・櫻井義秀、社会学者・田中優子、語り：高橋美鈴、D：矢部裕一、平井敦、制作統括：鎌倉英也、川添拓也、

7月9日（日）5:00～、59分枠、NHKEテレ　**こころの時代 宗教と人生「徹底討論 シリーズVol.7　宗教リテラシーをどう高めていくのか」**

△教育現場での宗教リテラシー。諸外国における宗教リテラシー。日本における宗教リテラシー（教育勅語がまだ生きる）。情報リテラシー。
出演：宗教学者・島薗進、櫻井義秀、神学者・平藤喜久子、批評家随筆家・若松英輔、牧師/宗教学者・小原克博、井上まどか、
語り：高橋美鈴、D：矢部裕一、平井敦、制作統括：鎌倉英也、川添拓也、制作著作：NHK、

4月15日（土）23:00～、59分、Eテレ　**ETV特集「誰のための司法か～團藤重光 最高裁・事件ノート～」**

住民が訴えた「大阪国際空港公害訴訟」。公害で初めて国の責任が問われた。△81年最高裁は2審を覆し住民を敗訴に。△判決から40年余、元最高裁判事・團藤重光のノートを発見。△関係者の証言でノートを読み解き、裁判の内実に迫る。△司法消極主義、行政行為の差し止めは受け入れられなくなった。△リサーチャー：藤岡ひかり、再現演出：佐古純一郎、D：小林亮夫、制作統括：東野真、制作著作：NHK、

5月2日（土）23:00～、59分、Eテレ　**ETV特集「自分を知りたい　特別養子縁組制度と"出自を知る権利"」**

特別養子縁組制度の創設から35年。菊田産婦人科の赤ちゃん斡旋, コインロッカーベイビー。△開示のルールは各家庭任せ。ルーツ探しは当事者負担。△「多くの課題が残されたまま。」▲語り：井上二郎、撮影：佐藤努、D：鍋島朔峰、制作統括：村井晶子、制作著作：NHK。

5月1日（月）10:25～、55分枠、静岡放送　**SBSスペシャル「袴田事件～此の国の司法を問う～」**

7月30日（日）10:00～、BSTBS　ドキュメントJ×静岡「袴田事件～此の国の司法を問う～」
8月6日（日）24:58～、60分枠、TBS　ドキュメンタリー解放区「袴田事件57年～最新の壁～」
△ナレ：辻村勅慈、佐藤剛史、大石岳志、取材：山口駿平、伊豆川洋輔、P：増田哲也、EP：小川満、制作：杉山武博、制作著作：SBS

5月17日（水）19:30、27分、NHKG　**クローズアップ現代+「ジャニーズと性加害問題」**

英BBCの放送・配信（3月）、カウアン・オカモト氏の会見（4月）、藤島社長の謝罪動画を受けて。△ジャニー喜多川の性加害問題を100人に聞いて、元タレント15人が証言。△99年週刊文春が特集報道。放送メデイアは問題にしない。△届かなかった性被害。被害を訴えた少年たち･･･。△ある種の共犯関係はメデイアの責任。「第三者委員会」は社会全体で仕組みを考えるべき。
ジャーナリスト・松谷創一郎、上智大助教授・斎藤梓。△キャスター：桑子真帆、

⇒⇒9月13日（水）19:30、27分、NHKG　**クローズアップ現代+「ジャニーズ性加害と"メディアの沈黙"」**

〝ジャニーズ性加害〟とメディア、被害にどう向き合うか、メディアの責任を考える。△9月7日、事務所の会見で性加害を初めて認めたのを受けて。△元ジュニアたち、性加害のトラウマを語る。フラッシュバック、体調不良。「社名を変えて」△心理カウンセラー「性虐待の破壊力は20年～50年に渡って影響を及ぼす」△“メディアの沈黙”は、なぜか？　NHK、民放の関係者40人を取材。
△元民放のPは『性加害は認識、だがスポンサー（CM出演など）に配慮し放送はタブーに。』△元NHK・04年歌謡演芸部長・大鹿文明『性加害の認識はない。マスコミ加担の責任を猛省する。』△元NHK職員たち『噂レベルで問題にはならなかった』、『ジャニーズ宅に泊まったが清濁併せて呑む』△ジャニーズ顧問・元NHKドラマ〝問合せに回答は無かった〟△元司法担当デスク『芸能ネタはNHK報道では扱わない風潮』『男性の性被害は問題にならない』△元文化担当デスク『文春報道は芸能界スキャンダル』△元社会部デスク『判断が甘かった』
△30年間放送の「クローズアップ現代」でも取り上げなかった。04年編責『性犯罪事件とは思わなかった』、05年編責『あの世界はそういうものだから』△松井裕子デスク『責任を重く受けとめている。なぜ、問題意識を自分自身で広げられなかったか。今後もさらに検証を続けたい』△弁護士・蔵元左近『今日の番組はまだ突っ込み不足。NHKの企業組織の問題がある、組織上どこがネックだったのか、第三者委員会を設置して調査をすべきだ』、『国連の人権指導原則･･･メデイア・事業体は取引先に適切な影響力を行使して、事務所の再発防止を厳しく監視し、具体的な対策を要請し、期限を明示して実行するよう要請する』
△語り：安元洋貴、キャスター：桑子真帆、出演：社会部デスク・松井裕子、弁護士・蔵元左近。

5月20（土）5:20～、30分枠、テレ朝　**日本のチカラ「"キラ星"たちの春　北の大地を巣立つ」**

△北星余市高校。98年から高校中退者を受け入れて、不登校と格闘。定年退職の菊池先生を通して描く。△Dの河野も34年前から取材、今回の作品が41作品目で最後。△語り：堀内美里、撮影：三上幸男、D：河野啓、P：渡辺圭一、雪竹弘一、制作著作：北海道放送。

6月18日（日）21:00～、49分枠、NHKG　**NHKスペシャル「ヒューマンエイジ 人間の時代　第２集『戦争　なぜ殺し合うのか』」**
最新研究から。「オキシトキン」が血縁を超えた協力、守る相手を線引きし、仲間以外には攻撃的に。△因果な本能を乗り越え、平和な世界へ向かえるのか?　△司会：鈴木亮平、出演：人類学･山極壽一、エジプト考古学･河江肖到、心理学者･デ・ドリュー、語り：久保田佑佳、取材：坂元志歩、Ｄ：佐藤匠、堀井凛太郎、天馬直実、高木英治、制作統括：井上智宏、浅井建博、山崎啓明、制作著作：NHK

6月12日（月）22:00～、45分、NHKG・前編　　6月19日（月）22:00～、45分、NHKG・後編
映像の世紀バタフライエフェクト「ビートルズの革命　前編『赤の時代』」『のっぽのサリーが起こした奇跡』
57年『のっぽのサリー』～66年8月以降、ライブ活動休止。に夢中のジョンとポール。△Ｄ：大里和也、Ｐ：滝川一雅、制作統括：久保健一、寺園慎一、制作著作：NHK
映像の世紀バタフライエフェクト「ビートルズの革命　後編『青の時代』」『そしてルーシーは宇宙を行く』
2021年探査機LUCYルーシーに４人のメッセージ。数千年後も聞いているのか？　△67年１月世界に「アワーワールド」のレコーディングを中継。～70年４月解散。活動８年。～03年ポール（60）がモスクワ赤の広場で公演。ゴルバチョフもファンだった！△Ｄ：秋山遼、以下同じ

6月20日（火）20:00～、99分枠、NHKＢＳ１　**ドキュメンタリードラマ「ケーキの切れない非行少年たち」**
ケーキを３等分できない、認知機能の弱さが引き起こす悲しみの連鎖。境界知能は14%、35人のクラスに５人いる。赤ちゃんを公衆便所で産み捨てて･･･１年後、少年院を出た少女は小さな命と向き合う。△インフルエンサーえりか、宮川医療少年院のドキュメントも。
原作・監修：宮口幸治、漫画：鈴木マサカズ、脚本：山口智之、演出：四宮秀二（パオネットワーク）、Ｐ：片島章三、金森保、制作統括：樋口俊一（NHK）、関英祐（ＮＥＰ）、山根幸太郎（パオネットワーク）、制作著作：NHK、？？

6月25日（日）24:55～、30分枠、テレビ金沢　**NNNドキュメント`23「森本商店街一座～小さな町の心意気～」**
金沢市の外れの森本商店街。大衆演劇の芝居小屋「おぐら座」を活性化の起点にと、10年前に店主たちが「森本商店街一座」を旗揚げ。九州の劇団「三桝屋」が支援。コロナ禍の苦戦を経て、舞台や盆踊りや花火大会で奮闘･･･。「儲からなくても頑張る、これが金沢の町外れの心意気だ！」△ナレ：渡辺裕太、監修：納富隆治、Ｄ：中崎清栄、構成・撮影・Ｐ：辻本昌平、制作著作：テレビ金沢。

7月５日（水）23:00～、30分枠、NHKG　**神田伯山のこれがわが社の黒歴史　　第4回「エステー "エルカル家電" の興亡」**
新シリーズ開始！企業の黒歴史（苦労の歴史）を語る･異色の経済番組。第４弾は生活日用品メーカー「エステー」の家電開発秘話。△語り：池田伸子、Ｄ：勝俣和仁、Ｐ：難波江祐平、茂原雄二、制作統括：伊東恵雄、柳田真顕、制作：ＮＥＰ、制作協力：スローハンド、制作著作：NHK、～～　**⑤「森永製菓　ラムネ商品開発の迷走」⑦「カルビー　夢の製造ラインの誤算」⑧「キリン　第三のビール12連敗の苦汁」**

7月８日（土）４:50～、30分枠、テレ朝　**テレメンタリー2023「LGBTQとわたし　～虹の下のリアル～」**
広島ホームテレビの記者･花房吾早子（39）が広島の性的マイノリティを取材、３月に自身もカミングアウト。△大阪朝日新聞本社に戻る。△６月メディア業界におけるＬＧＢＴＱ勉強会。△ナレ＆Ｄ：花房吾早子、Ｄ：藏田晃裕、Ｐ：立川直樹、制作著作：広島ホームテレビ。

7月16日（日）5:00～、59分枠、NHKＥテレ　**こころの時代「生まれてきた　生きてゆく　山崎理恵」**
高知市･山崎理恵（56）の障害を持つ子を育てる葛藤を超えて生きる意味･･･すべての人に役割はあり･尊さがある･･･を見つけていく半生を語る。△語り：上戸彩、撮影：角文夫、Ｄ：添田ひとみ、制作統括：西森大、鎌倉英也、川添哲也、制作著作：NHK

7月16日（日）21:00～、49分枠　NHKG
NHKスペシャル「混迷の世紀　第10回『台頭する "第３極" インドの衝撃を追う』」
△14億の大国が、デジタル植民地にならぬよう、自立したシステムを作る。△途上国に債務を負わせないで、デジタル化のシステムを無償で提供。△キャスター・河野憲治、Ｄ：高橋隼人、荒井愛夕美、二村晃弘、Ｐ：内田敢、制作統括：西脇順一郎、鴨志田郷、制作著作：NHK

7月17日（月）20:00～、30分枠、NHKＥテレ、第１回　**ハートネットTV「特集 旧優生保護法を考える　第１回『私たちが奪われたもの』」**
7月18日（火）20:00～、30分枠、NHKＥテレ、第２回　**ハートネットTV「特集 旧優生保護法を考える　第２回『"解決" への道』」**
△キャスター：瀬田寅太、出演：安田菜津紀（フォトジャーナリスト）、藤井克徳（『日本障害者協議会』代表）、松原洋子（立命館大副学長）、　△語り：河野多紀、Ｄ：鈴木洋平、小黒洋平、Ｐ：海老沢真、制作統括：渡辺由裕、制作著作：NHK

7月22日23:00～、59分、NHKＥテレ　**ETV特集「塀の中で手にした "鏡"」**
△山口県の「美祢社会復帰促進センター」。子どもを残して服役する女性受刑者たちの更正プログラム（絵本が親子関係をつなぎとめる）の１年

間を追う。△女性スタッフが制作。△語り：尾野真千子、取材協力：小学館集英社プロダクション、撮影：浅見織恵、Ｄ：吉川真由美、山内紗季、制作統括：生田聖子、村井晶子、横井秀信。制作著作：ＮＨＫ広島

７月 30 日（日）24:55～、30 分枠、高知放送　**NNNドキュメント 23「四万十川を生きる～最後の専業川漁師～」**
△日本最後の清流の川漁師・黒沢雄一郎の過去と現在。△川に土砂が堆積し、川が死んで、中古の船を買い、海の漁師の幼稚園生に。
最後の川漁師が消えた。△語り：島本須美、監修：松村宏英、Ｄ：林誉、Ｐ：嶋淳之介、ＣＰ：植村浩史、制作著作：ＲＫＣ

８月７日（月）23:00～、29 分、ＮＨＫＧ　**事件の涙「私の人生を生きていく　宗教2世『小川さゆり』の1年」**
△20 歳・脱会６年後に事件が起こる。自分だけでは無かった。22 年８月「小川さゆり」を名乗り告白。夫に支えられメディアに露出。１年のルポ。△子育てに悩む・・・両親が参考にならない。△語り：戸田菜穂、Ｄ&撮影：大淵光彦、制作統括：松田純、小笠原卓哉、制作著作：ＮＨＫ

８月８日（火）23:00～、29 分、ＮＨＫＧ　**事件の涙「何が彼女を追いつめたのか～ある自主避難者の死～」**
△自主避難した高橋由美（54）の自殺に至る経緯を辿る。△語り：永作博美、Ｄ：中島稔、制作統括：石井有、制作著作：ＮＨＫ福島

８月 12 日（土）23:00～　60 分　Ｅテレ　**ETV特集「鍵をあける　虐待からの再出発」**
△知的障害者施設の入所者 19 人が殺された事件から７年、県立「中井やまゆり園」の再出発２年間の記録。△21 年 10 月、至る処に鍵。
泉寮個室７室は光を遮断・風呂と食事以外扉を開けない。△22 年６月、大川貴志（改革プロジェクトチーム）指導の下、菅野大史園長の改革の模索が始まる。日中は部屋を出る。～略～　入所者一人一人の将来について話し合う。△23 年　６月の農園作業日、泉寮の７人が全員、生き生きと作業する。△語り：中山果南、撮影：榎本清、Ｄ：久保敬大、制作統括：佐藤綱人、村井晶子、制作著作：ＮＨＫ

８月 26 日（土）17:50 頃～、10 分程度、　**TBS報道特集「ジャニー氏性加害問題　検証第３弾『事務所の隠蔽体質と元Jr.たちの告白ビデオ』」**
「再発防止特別チーム」の報告書と記者会見を受けて。△秋本雄蔵「メリーさんは知っている」病気。当事者の会の人たちの証言。
△1988 年北公次の告白本、35 万部。89 年ビデオで訴える。告白本とビデオの編集者・本橋信宏（ノンフィクション作家、）は、メデイアの結果に「閉塞感」に襲われる。△カリフォルニア州のボーイスカウトの性加害。８万人・24 億円の損害賠償金。メデイアを巻き込んだ運動。

９月２日（土）4:50～、30 分枠、ＨＴＢ　**テレメンタリー2023「欠員議会　ひまわり町の憂鬱」**
北海道北竜町。３月選挙。定員８名・立候補者７名。82 歳の新人議員・村松和雄をフォロー。結局、無投票に。△町長選も議員選も 10 年以上行われていない。△ナレ：土屋まり、Ｄ：立田祥久、Ｐ：広瀬久美子、制作著作：ＨＴＢ北海道テレビ、

～2023 年度上半期のドラマ・3月中旬―9 月中旬～

１月８日（日）20:00～、43 分×全 48 回（予定）ＮＨＫＧほか　**大河ドラマ「どうする家康」**
大河ドラマ第 62 作、徳川家康の生涯を新たな視点で描く。△脚本：古沢良太、語り：寺島しのぶ、制作統括：磯智明、村山峻平、Ｐ：川口俊介、演出統括：加藤拓、演出：村橋直樹、川上剛、小野見知ほか、出演：松本潤、有村架純、広瀬アリス、岡田准一、阿部寛、ムロツヨシほか

３月 19 日（日）22:00～　53 分？×全５回　WOWOW　**連続ドラマW「FENCE フェンス」**
△日米地位協定が生きる復帰 50 年、ドラマで伝える沖縄の現実。△連続性的暴行事件の真相解明に、二人の女性が立ち向かう。雑誌記者は米兵（アジア系）との混血。もう一人のヒロインは米兵（黒人）との混血。△脚本：野木亜紀子、Ｄ：松本佳奈、Ｐ：高江洲義貴、北野拓、製作：WOWOW、ＮＥＰ、△出演：松岡茉優、宮本エリアナ、青木崇高ほか

４月３日（月）～９月 29（金）、８:00～、15 分×５日×26 週、ＮＨＫＧほか　**2023 年度前期　連続テレビ小説「らんまん」**
高知県出身の植物学者・牧野富太郎の人生をモデルのオリジナル作品。時代は幕末から昭和、愛する植物のために一途に情熱的に突き進んだ主人公・万太郎（神木隆之介）と 妻・寿恵子（浜辺美波）の波乱万丈の生涯を描く。△脚本：長田育恵、音楽：阿部海太郎、主題歌：あいみょん「愛の花」、語り：宮﨑あおい、Ｄ：渡邊良雄、津田温子、深川貴志、Ｐ：板垣麻衣子、　浅沼利信、藤原敬久、制作統括：松川博敬、制作著作：ＮＨＫ、△出演：神木隆之介、浜辺美波、志尊淳、佐久間由衣、松坂慶子、田中哲司、要潤ほか

４月 23 日（日）22:00～、55 分枠×全５話・シーズン１、７月９日（日）～全５話・シーズン２、10 月８日（日）～全５話・シーズン３
WOWOW　**連続ドラマW「フィクサー」**
日本を動かすのは、総理か、黒幕か―。世の中を裏から操る“フィクサー”の暗躍と金や権力に群がる人間たちを描く。△脚本：井上由美子、

企画Ｐ：青木泰憲、Ｄ：西浦正紀ほか、Ｐ：村松亜樹、高田良平、黒沢淳、制作協力：リオネス、制作著作：WOWOW、△出演：唐沢寿明、藤木直人、町田啓太、小泉孝太郎、要潤、吉川愛、斉藤由貴、駿河太郎、西田敏行、永島敏行、富田靖子、陣内孝則、内田有紀、小林薫

4月30日（日）22:00～、54分枠×全10回、テレビ朝日　**「日曜の夜ぐらいは」**
それぞれに悩みや事情を抱える・女性３人の友情を描く。△ラジオ番組のバスツアーで出会った３人は旅行の思い出にと１枚ずつ宝くじを購入。と、３千万円が当たってしまい･･･！　△脚本：岡田惠和、企画Ｐ：清水一幸、Ｐ：山崎宏太、山口正紘、郷田悠（ＦＣＣ）ほか、Ｄ：新城毅彦、朝比奈陽子、高橋由妃ほか、制作協力：ＦＣＣ、制作著作：ＡＢＣテレビ、出演：清野彩名、岸井ゆきの、生見愛瑠ほか

6月1日（木）Netflix世界配信、48分程度×全8回。　**「THE　DAYS」**
△原案：門田正隆「死の淵を見た男 吉田昌郎と福島第一原発」、企画脚本プロデュース：増本淳、Ｐ：関口大輔、増子知希、高田良平、ＥＰ：高橋雅美、高橋信一、Ｄ：西浦正紀、撮影：小林元、制作プロダクション：リオネスピクチャーズ、製作：ワーナー・ブラザーズ映画、協力：防衛省、自衛隊、大臣官房広報課ほか。△出演：役所広司、竹野内豊、小日向文世、小林薫、音尾琢真、光石研、遠藤憲一、石田ゆり子ほか
①「福島第一原発は水没しました」②「避難の必要性はありません」③「放出する放射性物質は少量です」④「福島を見捨てることになる」⑤「うちの会社は狂ってる」⑥」俺は生きて帰るわけにはいかなくなった」⑦「撤退基準を決めて下さい」⑧「日本崩壊のシナリオ」
△フジテレビのディレクターが会社を辞めて作った執念の作品。

6月24日（土）22:00～、50分×全5回　ＮＨＫＧ　**土曜ドラマ「やさしい猫」**
在留資格の無い『非正規滞在者』のスリランカ人と、ただ３人で暮らしたいと願う家族の物語。※「不法滞在者」はＮＧ！（国連総会決議）
△原作：中島京子（吉川英治文学賞受賞作、貧困ジャーナリズム特別賞）、脚本：矢島弘一、演出：柳川強、Ｐ：中瀬萌、大久保篤、制作統括：倉崎恵、制作著作：ＮＨＫ、出演：優香、オミラ・ジャクティ、余貴美子、滝藤賢一、伊藤蒼、池津祥子、石川恋、山内圭哉ほか

7月4日（火）21:00～、54分枠×全9回　**「シッコウ!! ～犬と私と執行官～」**
強制執行する裁判所の職員「執行官」の仕事を描くリーガルエンターテインメント。△原案：大川潤平「執行官物語」、脚本：大森美香、Ｄ：田村直巳、星野和成ほか、ＧＰ：横地郁英、Ｐ：川島誠史、菊池誠、制作協力：アズバース、制作著作：テレビ朝日、
出演：伊藤沙莉、織田裕二、中島健人ほか、各回ゲスト

7月7日（金）～9月22（日）24:12～、40分枠、全12回、テレビ東京　**ドラマ24「初恋、ざらり」**
軽度知的障害と自閉症の女性、不器用な恋。△原作：ざくざくろ、脚本：坪田文ほか5名、Ｄ：池田千尋ほか、ＣＰ：祖父江里奈、Ｐ：北川俊樹、廣瀬雄、制作：テレビ東京、東北新社、制作著作：「初恋～」製作委員会。出演：小野花梨、風間俊介、西山繭子、若村麻由美ほか。

7月15日（土）22:00～、54分枠×全10回、日本テレビ　**「最高の教師　1年後、私は生徒に■された」**
△卒業式の日、担任教師の私は生徒に殺された。自分の『死の未来』を変えるため、生徒と真剣に向き合う。〝30人の容疑者〟私を殺すのは誰だ！　△脚本：ツバキマサタカ、Ｄ：鈴木勇馬、二宮崇、ＣＰ：田中宏史、Ｐ：福井雄太、鈴木努、秋元孝之、制作協力：オフィスクレッシェンド、制作著作：日本テレビ、△出演：松岡茉優、芦田愛菜ほか、
△最終回：背後から浜岡（青木柚）にナイフで刺されるが、「２周目の人生から１年後、私は生徒に託された」

7月16日（日）21:00～、54分枠×全10回、ＴＢＳ　**「VIVAN」**
「敵か味方か、味方か敵か―冒険が始まる。限界突破！　アドベンチャードラマ。第1回107分。△原作演出：福澤克雄、脚本：八津弘幸、李正美、宮本勇人、山本奈奈、Ｄ：宮本陽平、加藤亞季子、Ｐ：飯田和孝、大形美佑葵、橋爪佳織、
△出演：堺雅人、阿部寛、二階堂ふみ、二宮和也、松坂桃季、役所広司ほか

7月17日（月）22:00～、54分枠×全11回、カンテレ　**「転職の魔王様」**
転職とは自分の人生の〝優先順位〟を考え直す機会だ。毒舌敏腕キャリアアドバイザーが求職者に働く自信と希望を取り戻させていく。
△原作：額賀澪、脚本：泉澤陽子、Ｄ：堀江貴大、Ｐ：萩原崇、石田麻衣、櫻田惇平、制作協力：ホリプロ、制作著作：カンテレ、
△出演：成田凌、小芝風花、各回ゲスト、

7月20日（木）20:00～、54分枠×全10回　フジテレビ　**「この素晴らしき世界」**
失踪した大女優にそっくりのパートに追われる主婦が、大女優になる、成り済ましコメディ。△脚本：烏丸丸太（鈴木Ｐのペンネーム）、Ｄ：平野眞、山内大典、Ｐ：鈴木吉弘、水野綾子、制作：フジテレビ、制作著作：共同テレビ、△出演：若村麻由美、木村佳乃、沢村一樹ほか、

☆　☆　☆
会員短信
（入稿順の掲載です。）

フォークソングの時代を振り返る

田中 秋夫

BSフジで7月22日（土）の夜10時に放送された特番「HIT SONG MAKERS～フォークソングスペシャル」を私は大変興味深く視ることが出来た。

この番組は「帰ってきたヨッパライ」から「バラが咲いた」、そして「神田川」まで1960年代の後半から70年代にかけて若者たちの間に巻き起こったフォークソングに焦点をあて、名曲誕生の秘密や当時の音楽事情などを今も活躍中の歌手や音楽関係者等のインタビューで明らかにした。さらに、番組ではそのヒット曲の産みの親である本人たち（南こうせつ、泉谷しげる、小室等、マイク真木、きたやまおさむ他）がテレビカメラの前で生歌を披露していた。

私は彼等のヒット曲が生まれた同じ時代にラジオの制作現場にいた。当時のラジオ編成は各局共に演歌中心の歌謡曲が主流で、多くの時間帯が歌謡曲で占められていた。一方、夜帯が若者の時間とされ、フォークが選曲される番組は深夜帯に集中していた。そのような状況の中で、私はフォークソングにこそ親近感を感じていた為、率先してフォーク番組の制作を引き受けてきた。フォーク・シンガーたちは団塊以降の世代で、きたやまおさむ氏作詞の「戦争を知らない子供たち」に表現されているように、それまでの大人世代の「価値観」や「感性」に対して否定的だったように思う。

やがて1970年代になるとフォーク系の曲が次々にヒットするようになった。私が担当していた番組のフォーク歌手たち、森山良子の「この広い野原いっぱい」を筆頭に、小室等と六文銭の「旅立ちの歌」。南こうせつの「神田川」等がヒットチャートを駆け上がっていった。やがて、吉田拓郎、井上陽水、松任谷由実等が登場し、歌謡曲に代ってヒット曲の中心を占めるようになっていった。その後、「フォーク」は「ニューミュージック」「J－POP」等とジャンル名が変遷したが、音楽業界の勢力地図は大きく変わっていった。

あの時代から半世紀あまりが過ぎたが、このBSフジの番組は当時の熱い時代を想起させてくれた。そして、私は今も当時の同志だったアーチストたちや各局のラジオ仲間たちと「歌とラジオの会」という集いで交流を続けている。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

日本最古の国宝と異常気象

河野 尚行

去年の秋、2万年も前に作られた石器が日本の国宝に指定されることになった。北海道遠軽町にある白滝遺跡から出土した旧石器時代の黒曜石の矢じり類で、これが日本における最も古い時代の国宝となる。

白滝遺跡は大雪山系の北東に位置する赤石山の山麓、オホーツク海に注ぎ込む湧別川の旧白滝村の丘陵地帯に広がる後期旧石器時代の石器製造遺跡で、この一帯は世界でも最大級の黒曜石の産地である。

これまで日本最古の国宝と云えば、縄文時代の遺跡から出土した「縄文のヴィーナス」、「縄文の女神」、「仮面の女神」、などと呼ばれる土偶5点と新潟県北部から出土した火炎土器で、縄文中期から後期の出土品である。

その縄文時代の国宝の全てが数年前に、上野の国立博物館で展示されていたので、ご覧になった方もおられると思う。その呪術的な野性美を最初に認め、絶賛したのは〝芸術は爆発だ〟と叫んだ岡本太郎である。

☆　☆

今度新たに、国宝に指定される黒曜石の石器類1965点は、遠軽町役場の職員だった遠間栄治さんが昭和の初めから採取したものが中心で、私は1968年の秋頃、番組の取材で遠間栄治さんを遠軽に訪ねたことがある。

遠間さんはこの時、既に64歳を超えていて役場も退職されていたが、網走モヨロ貝塚の米村喜男衛さん同様、郷土史家として世間に知られていた。遠間さんが収集した大量の黒曜石の石器類は、私設の資料館に保管され、幾つもの箱に整然と分類展示してあった。

大きいものは長さ30センチ余りの舟底形で、黒光りするガラス性の肌が美しく、なかには黒色に朱色の混じたものもある。大きめの先頭器はそのまま槍の先に装着、小さい細石刃は天然の接着剤で槍先に複数、装着すれば大型動物などを射止める鋭い武器になる。

7万年～1万1000年前は最終氷河期にあたり、北海道とサハリン（樺太）やユーラシア大陸は陸続きで繋がっていた。マンモスやヘラジカなどの大型動物を追ってやってき北方の狩猟民が、白滝の黒曜石の宝庫を発見したと考えられる。遠間さんの話では舟底形の大型石器は、それから細石刃を造る運搬用の素材だった可能性があるという事だった。

私がこの石器類に強い興味を示し、大学3年の夏に、海上遥かサハリンを望む稚内のオンコロマナイの丘で、北方民族のオホーツク文化の遺跡発掘に参加したことなどを話すと、遠間さんの話には一段と熱がこもり、この次、いっしょに黒曜石器の発掘現場に行きましょうとも約束してくれたが、遠間さんは間もなくして突然、亡くなってしまった。

☆　☆

白滝遺跡の発掘が本格的になったのは1995年以降である。旭川と湧別を結ぶ道路建設をきっかけに、北海道埋蔵文化センターなどが中心になり、筑波大学などが協力して大規模な発掘調査が5年間続けられ、黒曜石の石器460万点という膨大な量を発掘した。

白滝産の石器は道内各地からはもちろん、南は津軽海峡を越えて山形や新潟からも出土し、北はサハリンやアムール河下流のシベリアや、中国北部からも発見され、北方圏にも太古から広い交流圏があった事を示している。

今回、新しく国宝に指定された白滝の石器群も、既に国宝である縄文時代の土器類も、すべてが、長野県の諏訪地方以北に位置する北の大地からの出土品である。

ユーラシア大陸から北回りのルートでやって来たネアンデルタール人の血を若干含む狩猟民の末裔や、その影響を強く受けた人たちの、手になるものだろうか。

北海道には縄文時代の後には続縄文時代が続き、その後にはオホーツク文化を含む擦文時代が始まり、農耕を伴う弥生時代がやって来ることはなかった。そして北海道の原住民と云われる人々は、アイヌの人々が中心であるが、オホーツク沿岸には、数は少数ながら、オロッコやギリヤークなどが住んでいる。

これらの民族は明治国家に飲み込まれてしまうまで文字を持たず、大事なことは、アイヌの「ユーカラ」のように口承で、世代から世代に伝える無文字社会であった。

☆　☆

一方、日本列島の西側では縄文時代の末に、中国などから稲作がもたらされ、弥生時代がはじまる。温暖湿潤の地を好む稲は収穫量も

多く貯蔵も効き、多くの人口を養える。
やがて、青銅の祭器や鉄の武器類も登場、権力者が現れて魏志倭人伝が伝えるように各地に「クニ」が誕生する。集団ごとの争いは増えるにしても、弥生後期から日本列島の人口密度は西側に次第に傾いて行く。
更に時代が進み、漢字文字や仏教、儒教などが伝来して来ると、精神文化、物質文化とも西日本側が急速に多彩になる。
その結果、後の世に国宝や重文に指定される文化財の種類や数も、西日本側に圧倒的に多く生まれることになった。そして日本の国宝１２５０点の内、関東より西の日本に由来するものが９割近くを占める事になった。

☆　☆

だが、である……。最近の気候変動、強烈な温暖化はどうだ。日本列島の風土をも変えかねない勢いである。梅雨時には線状降水帯が多発し、夏の猛暑は各地で記録破りだ。もはや、地球沸騰の時代だと国連事務総長まで云う。
冷害続きで稲作には不向きであったはずの北海道や青森では、今や「ゆめぴりか」、「ななつぼし」、「晴天の霹靂」、などの特上米が次々と誕生し、全国に販路を広げている。
北の海でも変化は顕著で、サケ漁が減り、暖流に乗ってくるブリ漁などが増えている。
気候変化にも関係ありそうなのが地価の価格で、最近、値上がり率が一番高いのは、東京ではなくて、北海道だということだ。
このまま地球温暖化が進み、歯止めが駆らない事態が続くようならば、一体どうなるか。
夏の夜の連日の猛暑に茹だる中、久々に脚光を浴びた日本列島北端の白滝遺跡に想いを馳せるうちに、ある妄想にとりつかれた。
「温暖化がこのまま、とどめなく更に進めば、北海道や東北地方が、司馬遼太郎の表現を借りるならば〝北のまほろば〟として蘇り、弥生時代から西側に傾き過ぎてしまった日本列島のもろもろの重心を、少しずつ、いや時には大胆に、北東側にシフトしてゆくのでは……。」

☆　☆

これは、おそらく私の幻想なのかもしれない。だが、である。現実には北東シフトではなく、逆に、南西シフトが急速に進むものがある。
沖縄の南西諸島には〝敵基地攻撃能力〟が着々と設置されている。これは幻想ではない。

****

最近見たある記事

佐々木 光政

記録的な猛暑の夏となり台風の進路を気にしていた頃、民放連のウェブメディア「民放online」に気になる記事を見つけた。書き手は元ＮＨＫ専務理事の塚田祐之氏。私の尊敬する先輩で、同じ報道番組プロデューサー出身の方である。かつて私が福島放送局のポスト長の時代には東日本大震災などさまざまな局面で、当時理事だった塚田氏からご指導を頂いた。塚田氏は、最近ＮＨＫで「なぜ次々と、公共放送の信頼を損なうような事態が起きているのか」という疑問について事例を挙げ、かつての自身の経験も踏まえて問題点を指摘している。
「ネット対応、働き方改革……、放送現場を取り巻く環境が大きく変わっている。この際、きちんと放送現場の課題を総点検することが必要ではないか。」「放送に携わる人々は、『放送のプロフェッショナル』としての自覚と力量が求められている。」と結んでいる。
最近もやもやしていた私にとって記事は我が意を得たりの感があり、ＮＨＫ会長が替わって最近は少し様子が変化しているとも聞く。古巣の後輩たちの、志ある真っ直ぐな活躍を祈りながら、マウイ島の山火事や関東の水不足の続報が気になる残暑の毎日である。

****

明治村のこと

秋田 和典

愛知県犬山市にある博物館明治村は昭和四十年に開村しおよそ六十年近く経つ。貴重な近代建築を保存した施設で、テレビドラマや映画のロケでもしばしば登場する。
先日、名古屋市在住の建築史家、村瀬良太さんに明治村について話を聞いた。村瀬さんは「あいちのたてもの明治村編」という冊子を手掛けた方だ。
明治村の構想は、建築家の谷口吉郎さんと地元の名古屋鉄道の幹部、土川元夫さんが主になって始められたという。しかし準備が始まった頃はなかなか苦労があったようだ。構想が発表された時は高度経済成長期で、古い建物を残すことは新しい社会をつくろうという気分と逆行していた。それでも建築家や大学教授、伝統建築の修復の専門家らの尽力で実現することが出来た。その後も、建物の解体と復原の作業は大変だったという。解体する側も復原する側も経験のある人が少なくて手探り状態だったそうだ。
様々な人たちの協力で実現した明治村の魅力やエピソードが、関係者へのインタビューと共に冊子で紹介されている。
村瀬さんが印象に残る建物は、著名な建築家フランク・ロイド・ライトが設計した帝国ホテルの中央玄関と西園寺公望別邸「坐漁荘」。特に「坐漁荘」は近代数寄屋建築の傑作ということだ。
この明治村に関する冊子の発行元は「愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会」（愛知登文会）で、愛知県にある貴重な文化財について情報交換や支援活動をしている。ＨＰでもそうした活動が紹介されている。貴重な建物を残す意味をあらためて感じさせられた。

（ラジオ・ディレクター）

****

「光る君へ」の日々

黛りんたろう

もはや異常気象という呼称さえ死語に思えるほど、異常な暑さが当たり前になってしまった今年の夏、来年の大河ドラマ「光る君へ」に、応援監督として参加している。
時代は平安中期。摂関政治の極みとなった藤原一族と、紫式部の物語である。
時代物は、それなりに数多く手掛けては来たものの、この時代は、ほぼ初めてに等しく、宮中での有職故実、つまり、しきたりや決まり事、官位、部署によって複雑に変わる衣裳、頻発する漢文や和歌など、己の無知を恥じ、不勉強を思い知る日々である。
周知のように、我が国はかつて、学問も文化も、大陸から多くを学び、それを日本独自のものへと変化させてきた。
そしてこの時代は正に、その日本文化の花咲く、最盛期にあたる。
一〇〇〇年前の物語とはいえ、入り込んでみると、往時と現代との類似点、共通点の多さに驚かされる。まず、武家が台頭する前なので、戦らしい戦がない事。武家社会と異なり、比較的女性が生き生きとし、恋愛や結婚も、むしろ現代よりも、おおらかで自由だった事。そして、内裏での人事は、さながら現代の霞が関の官僚制度と酷似している事。さらに、狭い内裏での権力争いは、人々の噂や嫉み、謗りに大きく影響され、それはさながら現代のＳＮＳのようである事等々。
いずれにせよ、時代考証を精密に経ながら、エンターテイメントとして楽しんでいただけ

るよう、力を尽くしてゆきたい、と思う毎日である。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

芸と思想

前川 英樹

古典芸能にあまり縁がなかったのだけれど、20年くらい前だろうか、学生時代からの飲み友達から「君、文楽を観ないか」と誘われて、それ以来年に数回国立劇場に出かけるようになった。彼は、素浄瑠璃を大阪まで聞きに行くほどだったから、本当に好きだったのだ。その友人が一昨年逝ってしまって文楽からも足が遠のいていた。

先日、テレビで歌舞伎を中継していたので観てみた(〝紙谷町小歌舞伎〟テレビ朝日)。人気演目(弁天娘女男白波)のさわりの場(浜松屋見世先の場)なので、多少のことはわたしだって知っている。なかなか楽しめた。台詞回しや掛詞などの言葉遊びなどは私でも分かる。私の親たちが、〽弁天小僧菊之助などと口ずさんでいたのをかすかに覚えている。〽知らざぁ言って聞かせやしょう、とか〽さてどんじりに控えしは、などは親達の日常会話の中に登場したから、子供も覚えてしまったのだ。日本駄衛門、忠信利兵衛、赤星十三郎、南郷力丸…弁天小僧菊之助以外も朧気ながら覚えているのに、我ながら感心した。子供の頃の記憶というのはなかなか凄い。

見終わって、フトこんなことを思い出した。

「オッペケペ」(作:福田善之、初演:劇団新人会、一九六四年)に出てくる台詞だ。新劇の始祖と言われる川上音二郎を題材にした戯曲である。その頃、私も時々新劇を観に行っていたのだった。

「…おれは歌舞伎座に行って団十郎の芸をみたよ。…参ったね。歯ぎしりするような思いってやつだ。確かに思想はない。思想のない芸は芸ではない、おれはそう言っていたな。果たして、そうか?…」

そして、最近思い起こしているもう一つのフレーズがある。

「姐さんはこう言ってました　芸は売っても　身は売らぬ

あたしはオヒゲノ客に言いました　身は売っても　芸は売りません」

(「昭和期」高見順　詩集「死の淵より」)

テレビドラマ「春子と節子」を見ながらこのフレーズに行き着いた。軍の支給する絵具で翼賛体制下の人々を描写した長谷川春子、そのような絵具を拒んで残った画材で展示されることのない絵を戦時下で描いていた三岸節子。

戦後多くの思想論争(例えば、転向論の最大の論点はここに尽くされているのではないだろうか。

生き残るべきは「身」か「芸」か。

これは優れて現代的論点であると私は思う。問題は、それが切羽詰まった問いではなく、限りなく拡散してしまう状況にあるということだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

文化露寇事件を講談にした男

木村 成忠

今年四月九日『若宮丸漂流物語〜ふるさとなお遠く〜』という新作講談を上演する機会をえた。主催は私が会長をしている石巻若宮丸漂流民の会。表記の漂流民を顕彰するグループで会員は全国に九十人いる。台本は拙作。読みは約四十五分。にわか講釈師をやってくれたのは元ｔｂｃで現在は子会社の社長藤沢智子さん。現役のアナウンサーでもある。テーマは二二九年前仙台領石巻湊から出帆した乗組員十六人の船が嵐で遭難し漂流、ロシア領の島に漂着。ロシア人に助けられその十一年後ロシア船で送還され帰国した漂流民の話である。会場は漂流民の故郷のひとつ東松島市。百席用意した椅子は満席だった。

四人の漂流民を連れて来航したロシアの使節レザーノフは幕府との交渉が不調に終わったことに立腹し、長崎出港後部下に命じ当時の日本の領土カラフト、エトロフの幕府の出先を攻撃させ略奪を繰り返した。この事件は日本が外国から攻撃を受けた初めての出来事で、警備を命じられていた東北各藩の兵士たちはロシア相手に古い火器で戦わざるをえず、敗走するしかなかった。歴史家の磯田道史氏は「ペリー来航よりも重大事件。日本の近代化の重要なターニングポイント」と評している。これが「文化露寇（ろこう）事件」と呼ばれる出来事である。

若宮丸漂流民の講談を書くにあたって、漂流民を題材に講談を作った人はいないか調べてみた。いやぁ、いたんですよ。江戸時代にこの文化露寇をネタに講談を書いた講談師がいました。文化五年（一八〇八年）『北海異談』（全二十巻）の作者大坂の講談師南豊亭永助（なんほうていえいすけ）がその人。この講談は巻一〜七が伊勢神昌丸大黒屋光太夫関連、巻八〜十がレザーノフ・石巻若宮丸関連、巻十一〜二十が文化露寇という構成。これを講談本として出版した。幕府にとって文化露寇に触れられることは最も忌避したいことだった。幕府は「日本は武威の国だから異国はその強さに恐れをなして攻めかかることはできないだろう」と根拠のない自負を抱いていたが、ロシア軍とは所持する大砲等武器に圧倒的な差があったのである。東北各藩の兵士たち（幕府軍）は遁走。幕府はこれをひたすら隠し通そうとした。だが、隠すには関わった兵士の数が多すぎた。マスメディアが未発達のこの時代、講談は現在のテレビのワイドショーのような役割を果たしていた。隠したはずがすこしずつ漏れて行ったのである。禁を破った南豊亭永助は獄門に処せられ、版元や貸本屋は遠島（えんとう）となった。獄門とは打ち首・さらし首の極刑。それほど幕府は文化露寇での敗北を知られることを恐れていたのである。

（仙台市在住）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ミッドウエーの海

吉田 賢策

一九八六年6月北太平洋ミッドウェーの海は蒼く、空は澄み切っていた。船の上から読経と讃美歌が違和感なく入り交じり、すすり泣く声も聴こえる。ミッドウェー海戦慰霊の旅…海面下の亡き兵士に限りなく近づき弔う。甲板には海軍大尉だった幼なじみとわずかな新婚生活しか送れなかった若妻、前夜の澤地さんのインタビューで深い兄弟の絆を感じさせた兄など沢山の人であふれかえっていた。他の人とは離れて澤地さんの姿がある。澤地久枝さんは「記録ミッドウェー海戦」等この海戦に関する自著を風呂敷に包み静かに海に捧げた。

遺族の想いを乗せた船上の旅の記録は、事前の取材と合わせて8月にニュースステーションの終戦特集として放送された。渡辺美佐子さんにナレーションをお願いし、スタジオでは澤地さんが心情を吐露、自分にとっては忘れられない番組になった。真珠湾攻撃が始まってからわずか半年余、この海戦で日本は米国に大敗し、太平洋戦争の分岐点となる。4隻の空母等多くの艦船を失うが隠蔽され、多

くの国民は戦後ですら真実を知らなかったという。この海戦についていつかもう一度描きたいと思いつつなかなか果たせない。終戦特集番組は4度制作したがその都度追いかけたいものがあり手付かずに終わる。各局とも取り組む様子はない。そんな中で自分の立場も制作者から視聴者に変わった。

そして今年6月に待ちに待った番組が放送された。日米双方の視点からミッドウェー海戦に2回シリーズで迫るETV特集である。双方の戦死者について初めて詳細な情報を調べあげ、遺族に取材を重ねてきたものを基に番組独自の取材結果を重ね合わせ、多くの命が失われていく時々刻々を浮かびあがらせた。さらに日米の遺族を追跡取材、彼らのその後の歳月を追う。日本側三〇五六名、米国側三六二名、その「命の重さ」を問いかける。

指揮官の判断に翻弄される兵士たち、味方によって置き去りにされた命もある。沈みゆく船から脱出できたのはごく少数、放置された命も多い。数々の証言によってこの海戦の事実が浮き彫りになった。この取材は日本側にとどまらず米国側まで及び、丁寧に心を込めて行われた。

スタッフスーパーを見た時、放送人の会の懇親会で顔を合わせたことがある多くの方の名前があった。「武器ではなく　命の水を〜医師・中村哲とアフガニスタン〜」の東野真さん、「全貌二・二六事件」の右田千代さん・・優れた制作者が時間をかけて制作したものであり、同時になにか身近なものも感じさせた。

同じ6月「記録ミッドウー海戦」がちくま学芸文庫から復刊された。早速本屋で一冊手に入れ宝とする。本には船ごとに日米の全ての戦死者の名前が出身地や年齢等と共に載っている。ミッドウェーの海は夕方になると空の色を映し藍色から赤く染まる。遥か底まで、透明に澄む水を染めて。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ずっと追い続けてきて

塩田 純

今年の夏は、ずっと追い続けてきた新史料に基づく特集を制作している。

一つは「昭和天皇　御進講メモ」。去年の10月、旧家の屋根裏で小林亮夫ディレクターと共にほこりにまみれながら発見した。日中戦争から太平洋戦争までの12年間、昭和天皇に国際情勢を進講し続けた宮内省御用掛・松田道一の膨大なメモである。外務省に集まる国際情報を毎週木曜日、五〇〇回以上にわたって進講。それが開戦、終戦をめぐる天皇の決断に大きな影響を与えたことが明らかになってきた。番組は8月7日にNHKスペシャルで放送し、研究者から高い評価を受けた。これから89分の長尺版を制作する予定だ。

もう一つは松代大本営にかかわる新史料。敗戦後、朝鮮人労働者二四〇〇人が帰国する際につくられた名簿が米議会図書館に残されていた。この名簿をもとに3年前に提案したのだが、コロナ禍で中断。ようやく今夏、椿プロの金本麻理子さんが韓国ロケを行った。BS1スペシャル「幻の地下大本営」（仮）として9月30日（土）21時から放送予定だ。

ところで6月に刊行された大森淳郎著「ラジオと戦争　放送人たちの『報国』」は日本放送協会と戦争の関わりを追究した力作である。もともと二〇〇九年に放送された「ETV特集　戦争とラジオ」が出発点で、小生もCPとしてかかわった。大森さんはその後、放送文化研究所で調査を続け、退職後にまとめられた。

この本で「放送人」という言葉について興味深い指摘がある。一般に一九六一年に梅棹忠夫が「放送人、偉大なるアマチュアーこの新しい職業集団の人間学的考察―」という論文で指摘し「戦後に発生した新しい人種である」としている。しかし、大森さんによれば、一九四四年、戦中に刊行された放送研究誌のタイトルが「放送人」だった。この時「放送人」とはどのような人間を指していたのか―。奥屋熊郎という個性的な「放送人」の生涯を追いながら、詳述している。興味のある方は、是非ひもといていただきたい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

2023年夏　私の一日暮らし記から

濱辺 紘史

徒（あだ）し世に　声を限りに　蝉しぐれ

8月9日（水）

ここ数年、週の半分は実家のある北関東で過ごしている。家は市街地の普通の住宅だが、庭木雑草が多く、夏は庭から流れる涼風のおかげで冷房なしで済んできた。しかし今年の猛暑は桁違いで、窓を閉めてのクーラー使用を強いられ、蝉の声も届きにくくなった。

蝉といえば、私の心の中では、戦争や災害等で非業の死を遂げた人たちの叫びを伝える夏の番組と何故か分かちがたく結びついていて、その日限りと体を震わせて鳴く蝉の声が、私には、番組の効果音となっている。

朝、台風のため非公開で行われた長崎原爆祈念式典中継を見る。――「一木一草もない焦土と化したこの街が、市民の皆様の御努力によりこのように美しく復興を遂げられたことに、私たちは改めて、乗り越えられない試練はないこと、そして平和の尊さを強く感じる次第です」――式典での岸田総理のビデオメッセージだが、どこかおかしくないか。国民を戦争に引き込み、未曽有の惨禍をもたらしたのは国であり、その試練を乗り越えたのは、縁者の死を経験し、自らは、生き残ったことに苦しみながら必死に生きた被爆者たちではないか。そんな人達の心に寄り添いながら、国の指導者として、今何を行い、未来に向け何が必要かを語るべきなのに、どこかの歴史学者の如く他人事で、かつ自慢げに平和の尊さを説く傲慢さと能天気さは、かつて広島、長崎双方に勤務した私には、耐えられないのだ。

午後、収まらぬ気分のまま上京する。NHK広島時代に共に番組を作ってきた仲間たちの誘いがあったからである。昭和57年8月6日ナマ放送のNHK特集「きみはヒロシマを見たか」の中で紹介された〈37年ぶりに修復された原爆資料館所蔵の被爆ピアノ〉の演奏が、その41年後の今年再演されることになったのを機に、集まろうというのである。呼びかけ人は、当放送人の会会員で、この番組を制作した小河原正巳さん。私の先輩である。私はその年、広島に転勤したのだが、沖縄の少女を描いたドラマ人間模様「太陽の子」の後処理のため、着任が一月遅れとなり、8月6日に着任、その日の生中継スタッフとして参加したことを思い出した。ちなみに、2年後に〈掘り出された被爆三輪車〉が原爆資料館に寄贈されたことを取材し、昭和61年、被爆40年後のヒロシマの家族を描いたドラマ「ふたたびの街」を作った。この日、集まった仲間たちも、それぞれのヒロシマ体験を語り合いながら、これからヒロシマ・ナガサキに向けて何ができるのか考えよう、何か番組も作れるはずだと、70代から80代の年寄りたちが大いに盛り上がった。

8月21日（月）

10回目のドラマアウォードの地域ドラマ

選考会議があり、上京する。2週間前に11本の候補作DVDが送られ、それを見た上での会議だったが、正直、酷い結果となった。ドラマ制作にはヒト・モノ・カネが集約的に必要だが、放送界の構造的不況（地方ほどひどい）のためか、配信を前提にした細切れ多数回放送のミニドラマが多く、ショップチャンネルの〝地域特産品紹介〟やゴールデンタイムを席巻する〝グルメバラエティー〟に倣ったのか、食や特産品をテーマとしたものがほとんど、この傾向はここ数年続いており、今後の地方ドラマの展望を閉ざしかねない。特に責められるのはNHKである。例年、NHK、民放、それぞれ10本程度が出品され、受賞も双方1本ずつという形が続いてきたが、今年は、これまで地域ドラマを支えてきたNHKからの出品がわずか1本だけ。銀行経営者の前会長の〈改革〉によって地域ドラマ枠が無くなったせいである。方針の撤回を求めたい。地域局のドラマ制作を経験してきた私には、地域局の視聴者サービス、地域ネットワークを生かした若手PDの育成、地域局のインセンティブに大いに役立つ等の効用がよく分かる。合理化における〈選択と集中〉は、使いどころを間違えてはいけないはずだ。

夜帰宅すると、9日の広島の仲間たちの集いで一緒だった松岡洋之助さんからの手紙と本が届いていた。松岡先輩は、当時私と同じ制作部のデスクをしており、広島局管内中国5県の共管番組のまとめ役であった。毎週の放送時間には、管内5局の若手PDが自局に待機し番組を視聴、松岡さんの的確な批評を聞き討議に参加する〈電話による番組研究会〉が恒例であった。九州熊本出身の松岡さんは、60年代末の反戦運動の闘士でもあり、長い間福岡や広島を中心に幅広く番組を手掛け、RKBの木村栄文氏や山口放送の磯野恭子氏などと共に、民放NHKを問わず地域交流の輪を広げてきた放送人である。届いた本は、福岡の石風社発行の「ドキュメンタリーの現在九州の足もとを掘る」。著者はNHK福岡放送局のディレクター・吉崎健氏（かつて私が長崎局勤務時代に在籍していた若き後輩）、RKB毎日放送の記者・神戸金史氏、九州朝日放送のプロデューサー・臼井賢一郎氏の3人で、いずれも九州という地域に軸足を置き、数々の秀作を制作しながら九州の制作者を糾合し、16年間、「福岡メディア批評フォーラム」を60回にわたり開催し、木村栄文氏が中心になって始めた「九州放送映像祭」以来の制作者交流を継承している。本の内容は、今のメディア状況、特に地域のおかれた環境を体験的に鋭く分析するとともに、ドキュメンタリーにかける情熱を語っている。是非読んでほしい本だが、ひとつ記したいのは、著者の一人がこう言っていることだ。―「何のためにこの仕事に就いたのか」と言われて「勤務先（＝会社）を大きく成長させたいから」と答える人は、私の仲間ではほとんどいない。「自分が大事だと思うことを知らせたいから」「人に知ってほしいから」―と、純粋に表現者としての心意気を語っていることだ。東京の私たちは地域の放送人をもっと知るべきだと、改めて感じる。

9月4日（月）

一昨日、昨日と連続して放送された「NHKスペシャル　映像記録　関東大震災　帝都壊滅の三日間」を見た。混乱の中の撮影で撮影場所や時間が不明なものが多かった資料フィルムを高精細・カラー化した。建物の形、看板、影、そして人の表情が鮮明に浮かび上がる。それらを手掛かりにワンカットずつ撮影場所と時間を特定し、一級の歴史資料として生まれ変わらせたのである。私は、モノクロフィルムのカラー化については、従来から、使いようによっては歴史の修正に通ずるとして懸念を持ってきたが、今回の高精細カラー化は期待できる。これまで、あいまいさを理由に、虐殺はなかったとか侵略はなかったという類の妄言や陰謀論に対して、科学的に反証することができるからだ。改めて、正しい知見と厳正な手続き（手法）によって一〇〇年前を再現したNHKの制作者たちに敬意を表する。――炎風から逃げ延びて被服廠跡の鉄骨に腰掛ける女性や子供の安堵した表情、朝鮮人を探す自警団の男の鋭い目つきは、その直後に彼らに訪れた無残な死を知るだけに、その映像はドラマ以上にドラマチックであった。

そのNHKに最近危惧することがある。8月23日の「歴史探偵　家康VS秀吉　どうする家康コラボスペシャル」が大河主役の松本潤をゲストに〈歴史を伝えた〉ことだ。今年の大河ドラマのナンセンスな歴史解釈は、フィクションだとして許されるとしても、バラエティーとはいえ、歴史を伝える番組をドラマのイメージに基づいて制作することには慎重であるべきだろう。それでなくても、NHKは地域ドラマの制作をやめる一方、ここ数年、キラーコンテンツの「朝ドラ」「大河」を前面に押し立て、同時にドラマを使って他の番組を盛り上げる編成戦略をとっている。〈朝ドラ受け〉、ドラマ出演者の情報・バラエティー番組へのゲスト出演、つまり〈ドラマ・コラボ番組〉の横行である。こうしたNHKの経営＝〈ショーバイ〉に奉仕する番組は、商業放送の民放ならともかく、受信料で成り立つ公共放送には、あってはならず、私がドラマPだった80年代は、出演者ダブりは避けるべきものとされ、先々のキャスティング情報を編成に提出し、公平な調整を行っていたはずである。

考えてみれば、ジャニーズ問題で指摘されたメディアの沈黙、忖度も、放送という公共のメディアが〈視聴者の知るべき権利に応える〉ことより〈視聴率優先＝ショーバイ優先〉を重視するという考え方の結果に他ならず、かつてNHKスペシャル「日本海軍　400時間の証言」が指摘した、組織に従属するゆえの〈やましき沈黙〉が、変わらずこのメディア世界を支配している証拠ではないか。改めて、ドラマであろうと、ドキュメンタリーであろうと、報道であろうと、あらゆる制作の現場にある放送人にとって、九州の放送人の言う「勤務先（＝会社）を大きく成長させたいから」ではなく、「自分が大事だと思うことを知らせたいから」「人に知ってほしいから」仕事をするという、放送人としての「矜持」が今こそ必要なのだと思う。

放送には、〈政治権力からの自由〉に加え、〈企業＝ショウバイからの自由〉も重要だ。

昨夕、久しぶりに蝉の声を聴いた。ヒグラシだ。夏の終わりを告げるヒグラシ、今日はもう鳴いていない。久しぶりに庭先に現れた若い野良猫がセミの抜け殻にじゃれついていた。

空蝉が　舞いながら去る　猫パンチ

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『ドラマ私史』を出版しました

市川 哲夫

酷暑の続いたこの夏、テレビが伝えたニュースも明るい話題は少なかった。

思えば昨年起きた「安倍元首相銃撃事件」以後、日本が抱えていた暗部が表面化して来た気がする。「統一教会問題」「東京五輪汚職」「ジャニー喜多川事件」「原発処理水海洋放出」等々。

これまで閉じられていた「蓋」が、吹き飛ばされた印象であり、私たち放送人自身にも突き付けられた問題である。「黒船来航」以来、外圧でしか日本社会は変わらないのかという、「国民性」をも考えてしまう。ジャニーズの件も、3月のＢＢＣの報道がなければ問題化しなかったのだから。

報道ジャーナリズムの「自由度ランキング」では、第二次安倍政権以降急落し世界の70位前後に低迷しているのも、むべなるかなである。

私自身の近況報告としては、日本映画テレビプロデューサー協会と放送批評懇談会・報道活動部門の仕事を続けているが、この9月に自著を出版する事が出来た。

ＴＢＳ「調査情報」誌に連載した『夢の途中～いかにしてテレビ教徒になりしか』の単行本化である。ちょうど「テレビ放送開始70年」の今年に出版出来たのはタイミングとしては良かったと思っている。

先に作家の小林信彦氏に『テレビの黄金時代』、そして本会の今野勉会長の『テレビの青春』という名著があるが、私としては時代的にも世代的にも、大先達お二人の「衣鉢を継ぐ」気持ちで書いた。

単行本化にあたっては、『証言　ＴＢＳドラマ私史　１９７８～１９９３』（言視舎刊）と題した。会員の方々のお名前も（ＴＢＳに限らず）随所に登場しているので、ぜひご笑覧いただければ幸いである。

ここのところ『世界サブカルチャー史④日本編』（ＮＨＫ・テレビマンユニオン）でも、60年代から90年代を取り上げ話題となっているが、未来を展望するには、過去を知れという問題意識がそこにはある。拙書も、そうした意識付けの一助になれれば幸いである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『らんまん』からの旅

千葉　邦彦

この半年間、連続テレビ小説『らんまん』（ＮＨＫ総合ほか、2023年度前期）を熱心に観ている。「日本の植物学（植物分類学）の父」と称される牧野富太郎博士（1862年–1957年）をモデルにした主人公・槙野万太郎の生涯を描く、「朝大河」と呼んでもいい良質のドラマである。感銘を受けた私は、自らの連載エッセイ「放送の100年へ　1925–2025」（月刊『通信文化』（発行：（公財）通信文化協会）で、『らんまん』と牧野富太郎を3回にわたって採り上げた。そこにも書いた〝番組論以外の話〟を紹介しつつ、近況報告としたい。

私はたまたま「牧野記念庭園」（練馬区東大泉）の近くに住んでいるのだが、『らんまん』の放送が始まって以来、庭園を訪ねる人が何十倍にもなったことを嬉しく思う。町の至るところに番組ポスターが掲示されるとともに、牧野の底抜けに明るい笑顔の写真や絵を配したパネル、立て看板、幟が飾られていて、牧野の蒔いた種が一斉に花開いているかのようだ。

ところで、私の身近なところに、大きな意味で牧野富太郎の系譜に連なる人物がいた。都立小石川高校時代の親友で、鈴木和雄という。幼少時から植物に関心をもち、とりわけ羊歯を研究対象としていた。彼の自宅からほど近い小石川植物園（正式名：東京大学大学院理学系研究科附属植物園小石川本園）を訪れたときは、豊富な知識で園内のさまざまな植物について説明してくれた。小石川植物園は牧野が長く研究生活を送った場所であった。

鈴木は、これも自宅から近い東京教育大学の理学部生物学科に進み、東京都立大学理学研究科博士課程を経て理学博士、同大学・植物系統分類学講座（牧野標本館）助手から助教授、山口県立大学生活科学部教授、徳島大学総合科学部教授を歴任した。一九八〇年前後、鈴木は私の勤務地の広島に突然現れ、また、練馬の新婚家庭にも遊びに来て、飲んで歌って泊って行った。その数年後、彼の結婚式で望まれたときには、高校時代に一緒にバンドを組んで演奏したビートルズやローリング・ストーンズではなく、エルヴィス・プレスリーの「ラブ・ミー・テンダー」を歌った。その場面が昨日のことのように思い出され、感傷的になってしまう。というのも、彼は二〇〇四年2月に肝臓ガンのため入院し、9月に早世したからだ。53歳だった。軸がしっかりしていて、心が温かくて、素晴らしい人物だった。悲しみは途方もなく大きい。学会誌には彼の多くの業績が記されており、植物学の世界が鈴木和雄という大きな存在を失ったことが門外漢の私にも分かる。

鈴木が病室で取り組んだ遺稿が二〇一九年9月、由美子夫人により、『マル ハナバチと植物の話　送粉生態学入門』として出版された。二〇〇四年の夏、病床で、控えめにほほえみながら、『この本を書いてよかったよ』と言った夫、鈴木和雄の表情を何度も思い出します」に始まる「編集を終えて」を読むたび、目頭が熱くなる。由美子夫人、長女・ももさん、長男・胡太郎さん、同僚の研究者の皆様、編集者の方々の共同作業に頭が下がる。こうして鈴木の業績を紹介することが、新たな誰かの知的好奇心を揺り動かすきっかけとなればと願う。そして、私は鈴木の厖大な足跡のごく一部を辿るべく、若き日の彼が調査のために長期間滞在した屋久島を訪れたいと思うのである。

鈴木の先達である牧野も採集のために一時期住んだ屋久島とはどのようなところか。下調べを始めた私の助けとなっているのがＮＨＫの自然・紀行番組の数々である。屋久島がユネスコの世界自然遺産に日本で最初に認定されて30年の節目にあたる今年、ＮＨＫは屋久島に関する番組を多数放送している。番組名は略すが、どの番組にも、ＮＨＫが長い時間をかけて屋久島の自然に取り組んできた成果が生きている。

植物学の研究者にとって、屋久島ほど魅力溢れる場所は国内には見当たらないのではなかろうか。二〇〇〇メートル級の山々が聳えているため、ひとつの島の中で北から南へと長い日本の自然植生を観察できる屋久島。そこには、地表を覆う苔類から樹齢一〇〇〇年、二〇〇〇年超、なかには七二〇〇年という信じ難い年月を経てきた天然杉の超老樹まで、多種多様な植物が生きている。そのような存在と時間を前にしては、人の一生も「放送の一〇〇年」もあまりに短いというほかはない。

さあ、屋久島へ！　（文中敬称略）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「アレ」「アレ」「アレ」

加藤　滋紀

今年の阪神タイガースは強い。この会報が読者に届くころには、18年ぶりにセ・リーグの「アレ」を達成していることは間違いないだろう。

タイガースは今シーズン新監督に岡田彰布氏を迎えて生まれ変わった。新監督は今年の目標を「ユ」の字のつく言葉で説明すると選手

が緊張して満足なプレーが出来なくなる恐れがあるとして、あえて目標は「アレ」にすると表現した。勿論、こんな話はすぐにファンの耳に入る。以来、選手とファンにとって「ユ」の字は禁句となり、「アレ」と言えば誰もが分かる共通の目標となった。言うまでもないが、長年のタイガースファンである私も「ユ」の字の言葉は決して口にせず、「アレ」と表現するようになった。

ところで、昨日（9月9日）NHKの総合テレビが阪神・広島戦を中継放送していた。試合は見事な阪神の勝利で終わった。その放送の中で、実況担当のアナウンサーは平気で「ユ」の字の言葉を連発していたが、さすがに試合終了後の殊勲選手インタビュー担当のアナウンサーは、最初のうちは「ユ」の字の言葉を使っていたが、途中からは選手に合わせるように「アレ」と言い始めた。正しい日本語を使うよう厳しく教育されている公共放送の生真面目なアナウンサーが、ついに我々にしか通用しないはずのあの言葉を全国向けの生放送の中で使ったのだ！タイガースの影響力はここまで強くなった！

ところで、タイガースの「アレ」が現実のものになると、「アレ」という言葉は様々なテレビ番組や新聞・雑誌で紹介され、野球に興味のない人も含めて全国的に知られるに違いない。その結果、「アレ」が今年の流行語大賞に選ばれるというのは夢物語だろうか。流行語大賞は一昨年が「リアル二刀流／ショータイム」、昨年が「村神様」とプロ野球に関する言葉が続いた。そして今年が……。やっぱり今年は遠慮しよう。「アレ」という言葉は有名にならなくてもよいのだ。選手とファンが密かに共有する宝物なのだから。

（9月11日の夜）

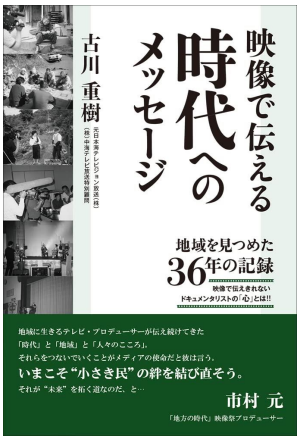
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「語る会」のメッセージ

古川 重樹

「一人の人間と出会い、記録していくとき、心揺さぶられる瞬間がある。私はその瞬間に魅せられていくつかのドキュメンタリーを手掛けてきた。人間ドラマはそれぞれに個性があり、決して同じではない。時を縦糸に、人を横糸に、どう紡げば〝時代を映す重厚なドラマ〟に仕上がるかを考え続けた。」

昨年12月に発刊した「映像で伝える時代へのメッセージ ～地域を見つめた36年の記録～」で、私があとがきで記した一文である。



メディアの世界に飛び込んで半世紀が過ぎ、日本海テレビ放送と中海テレビ放送（ケーブル局）で手掛けたドキュメンタリー作品は40本を数える。

臓器移植、福祉、環境、教育、戦争など手掛けた作品のテーマは多岐にわたっている。

山陰地方がエリアのテレビ局だけに、地域におけるテーマの多様性に重点を置いた。関心を抱くすそ野が広く、あれもこれもと食らいついた。この本では、NNNドキュメント'86で全国放送した「生命の絆 ～腎臓移植の明日～」を初め10本の作品を取り上げ、制作の意図、過程、取材中でのエピソード、放送後の反響、そして、出演者とその後の関りについても触れている。

その作品群の中でいつまでも心に残る作品がある。NNNドキュメント'98で放送した「クラウディアからの手紙」である。終戦直後に大陸でスパイ容疑で逮捕され、シベリアへ抑留された蜂谷弥三郎さん。鳥取市気高町で夫の生存を信じて帰国を待ち続けた妻の久子さんと鳥取駅で51年ぶりの再会を果たす。一方、ロシアでスパイ容疑の弥三郎さんを長年支えながらも日本で待つ妻の元への帰国を促したクラウディアさん。戦争によって人生を翻弄された3人の数奇な運命を描いた「奇蹟の愛の物語」である。地方の時代映像祭「大賞」を受賞し、ホリプロや東京芸術座によって舞台公演も行われた。日本海テレビには、今なお、再放送を望む声が届いている。

もう一作品は、中海テレビで制作した「中海再生への歩み～市民とメディアはどう関わったのか～」である。鳥取県と島根県にまたがる日本で5番目に広い湖で19年に及ぶ市民と地域メディアによる水質改善運動を記録したものだ。この作品は全国規模の番組コンクールで最も歴史と権威があるとされているギャラクシー賞報道活動部門で「大賞」を受賞した。NHK、民放以外のケーブル局が「大賞」を受賞したのは初めてのことだった。

ドキュメンタリー史の出版をきっかけに新たな動きが生まれた。日本海テレビと中海テレビによって実行委員会が立ち上げられ、7月22日に米子市の文化ホールで「語る会」が開催された。「放送人の会」の河野尚行さんも東京から駆けつけて頂き、会場には130人が訪れた。「クラウディアからの手紙」など6本の作品を取り上げ、制作者とそれぞれの番組出演者が登壇して取材当時の想いを〝本音〟で語り合ってもらおうという企画だった。この本でも知りえない事実を明らかにしてもらうことでドキュメンタリー番組の新たな魅力に迫りたいと考えたからだ。双方が思い出すように30年前の取材当時の体験談などを語り合い、時間の経過を忘れるほどだった。午後2時に開演したが終わったのが5時半だった。

私は1本1本の作品の制作過程で、〝人との出会い〟とか〝人との繋がり〟を何よりも大切にして来た。その絆は制作者と番組出演者という立場を超えて30数年を経た今も続いている。

（鳥取市在住）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

漂う暗雲
テレビと新聞の未来

石田 研一

8月31日、総務省の公共放送ワーキンググループが報告書をまとめた。ネットでも番組などを届けることをNHKの必須業務とし、テレビを持たずスマホにアプリをダウンロードするなどして視聴する人から相応の負担を求めるとしている。一方で、NHKの行ってきたテキストニュース等についてはこれまでより抑制的にする方向が打ち出された。今回の問題をめぐるNHK、民放連、新聞協会の議論を朝日新聞の社説は「縮小するパイを業界内で奪い合うように見えたことは残念だった」と論評した。コミュニケーションの土台がネットに移っていく中で、将来のビジョンを描き切れないメディアの姿を浮き彫りにしているように見えた。NHKのネット業務に制限をかけても新聞の部数が減少するのを防ぐことはできないだろう。NHKが一部のネット利用者に負担を求めても当面大きな増収には繋がらず、テキストニュース等の範囲を狭めることを容認するような姿勢は視聴者へのサービスの縮小だ。

ネットに溢れるフェイクニュースやフィルターバブルなどの問題はますます深刻になっ

ている。テレビや新聞も誤報を流すことはあるが、放送法4条のある放送や自らを規律してきた新聞には一定の信頼感があり、その役割は今も大切だ。テレビや新聞に求められることは、目先の利害でお互い足を引っ張り縮小していくのではなく、協力して自らの存在感を高めていくことではないのか。ＮＨＫと民放はハードの面を中心に連携を図ることができるし、ＮＨＫのネット基盤を地方新聞などが利用することも検討できるのではないか。読売新聞が主張しているネット上で発信者の信頼性を確認できる技術に新聞、放送が協力することも可能ではないか。「確かな情報」が社会の基盤とならなければ民主主義の危機を招く。テレビや新聞には優秀なクリエーターや記者がいる。テレビや新聞はその人材を生かして社会に貢献するため、将来を見据えた高い視座に立つことが求められているように感じる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ボランティアであること

ＤＡＰ担当　深尾　隆一

「放送人の証言」に関する企画立案とその実現に向けて、実際に動ける方を求めています。必要な資料はご希望があればお送りします。

ご存じのように放送人の会は、証言に関して「放送一〇〇年デジタルアーカイブプロジェクト」通称ＤＡＰとして、二〇二五年春を目指して企画準備中です。会の発足の翌年一九九九年に開始し現在に至っている「証言」は、放送に貢献した人達の映像によるものとして唯一無二であり、資料価値が高いものです。

ＤＡＰはこの貴重な財産を、放送関係者・研究者・放送を目指す人達に対して、より広く知らしめ、還元していくことを目的としています。具体的には現在30名の証言をYouTubeにアップし、計213名分に及ぶ証言の分類・整理も進行中です。

実現にあたっての課題は、費用とマンパワーです。

放送人の会会報の第一号を読んでみました。そこに溢れる熱気に圧倒されました。ボランティアは意気に燃えてやるものである、とつくづく感じさせられます。結果として否応なく会の現状と比較してしまいます。

高齢化、会員数の減少、財政の逼迫、事業の縮小傾向など、ここ数年で一気に会の状況が悪化して来たように思えます。そもそもメディアの多様化により「放送人」の意味も変化し、時代に遅れをとり始めているのかも知れません。四半世紀近く経ればしょうがない要素もあるでしょう。

しかし、何より大きいのは会員の意識の変化にあるのではないでしょうか？　発足時にあった、「視聴者の信頼を取り戻すためには何かしなくては」という共通の危機感、その意気に燃えた人々の自発的な意思が「日韓中テレビ制作者フォーラム」「名作の舞台裏」「放送人の証言」等々という今も続く事業企画・財産を生み出しました。今その自発性とそれを支える意気、そして思いを実現していく若さが、少なくとも発足時に比較すると後退してきているように思います。結果はマンパワーの不足となります。

その意味で今放送人の会は、創立時とは別の「危機感」を覚えるべき状況にあるのではないでしょうか？今こそもう一度「何とかしなければ」という意識のもとにボランティアとしての力を結集すべき時、ＤＡＰで言えば、先人が築き上げた財産をしっかりとした果実に仕立て上げて出荷すべき時なのではないでしょうか？それによってもう一度会としての活力を取り戻すきっかけとしたいものです。

ドラマ・ドキュメンタリー・報道・技術・美術等々、会員には経験者が大勢います。人脈も豊富でしょう。まだまだ体力・気力に溢れた方が多いはずです。皆さんのマンパワーに期待します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

灼熱化の長い夏

菅野吉呈

9月上旬、Ｊの問題で、クロ現の若いディレクターから2回に渡って取材を受けた。99年の大河ドラマ「元禄繚乱」のキャスティング事情と、ドラマ部と事務所との関係など、2日間で計3時間余の取材だった。

「元禄繚乱」では、浅野内匠頭に東山紀之、吉良上野介の息子に滝沢秀明、赤穂浪士の矢頭右衛門七に今井翼をキャスティングした。

97年の晩夏、出演交渉はマネージャーのＹ氏（ＮＨＫ担当）を通じて行う。東山内匠頭は演出の大原誠の要望で、若い2人はジュニアの中から事務所の推薦を仰ぐ。

当時ＢＳ２で日曜夜18時から30分『MusicJump『Boy's side』というジュニアが出演する番組（後に「ザ少年倶楽部」になる）があった。そのダンスの稽古が週2日から3日、ＮＨＫのリハ室で行われていた。

9月下旬、Ｙに伴われてリハ室に入ると、野球帽を目深に被ったジャニー喜多川（66）がいて、踊っていた滝沢くんと今井くんを指さした。ジャニーに選ばれるとスターになる、2人は02年、タッキー&翼でデビューする。

なぜ、事務所が大河に出すのか、俳優の卵のジュニアにとって着付け、所作ごと、殺陣、芝居が無料の特訓で学べる得がたい機会だからだ。「元禄繚乱」は滝沢の養父が石坂浩二、養母が夏木マリという誠に恵まれた環境だった。

◇◇　◇◇　◇◇

88年～89年の「北公次の告発」は殆ど記憶にない。その頃、私は大阪放送局でドラマのプロデューサーだったが、上司からは何も言われなかった。そもそもが「ドラマ人間模様」にいたからか、演出の時からキャスティングは地味だった。芝居が出来る役者を使う。脚本が遅い作家が多かったので、スケジュールにゆとりがある役者、遅い脚本を待てる役者を好んだ。だから忙しい人気の役者やアイドルとは縁がなかった。

役者の事務所には拘束ばかり長くてギャラが圧倒的に安い、大河以外はメリットが無いとも思われていた。ただ、ＮＨＫのドラマは本読み稽古が必ずあって芝居がやれると、見識あるマネージャーと事務所には一定の評価があった。

しかも、Ｊ事務所は番組宣伝に、タレントの撮影現場での「広報写真（ＮＨＫの番組広報部の契約カメラマンが撮影」を使わせてくれなかった。写真が出回って闇で売られるのを防いで、ファンの子どもたちを守るためだと言われていた。

なんとも、使い勝手の悪い事務所だった。

放送のデジタル化が進んで、私も普通にパソコンを使うようになって、Ｙマネージャーに聞いたことがある。写真の方針はトップ2人が引退して世代交代したら、さすがに変わるでしょう、と。

Ｙ氏はイエスともノーとも答えなかった。

◇◇　◇◇　◇◇

そして99年11月4日号から週刊文春がジャニー喜田川の性虐待を特集記事で連載した。11月「元禄繚乱」の収録は終盤で、文春の報道は記憶にない。仲間に聞いても、ドラマ班では話題にはなっていない。

その記事が裁判になり、第2審の判決でJ喜田川の性加害の事実を認めたため、事務所が上告したが、04年2月最高裁はその上告を退けた。折々の裁判と最高裁の判決は話題にはなっていない。

クロ現のディレクター氏は、顔を出さなくてもいいから、ドラマOBのコメントが欲しかったのだが、事務所と関係が深いのはエンターテインメント部で、ドラマのPとしては特異種だからと遠慮させてもらった。

さぞかし、頼りがいのないOBだと思われたに違いない。灼熱化の長い夏、彼に借りが出来たようだ。

（9月26日記）

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

特別寄稿

「オレたちの放送法なんだぜ」

―放送法問題を少し遠回りして考える

2023. 8.

前川 英樹

今年の前半、「政治的公平」（放送法4条）に関する総務省内部文書と当時の総務大臣発言などを巡って放送と言論表現の自由の関係が議論されているときに、「放送人は何故発言しないのか」という指摘があった（朝日新聞2023. 4. 18. 是枝裕和氏）。推測するにここでいう「放送人」とは報道現場の記者や番組制作者だけではなく放送局経営家者、団体なども含めた意味であろう。いうまでもなく、私たち「放送人の会」もまたその外にいるわけではない。この数年の間に、メディアについてあれこれ書き留めたことや心に残った識者の発言などを改めて読み直し、私の関心と思考がどの辺にあるかを手探りで確かめながら、何か問題提起になるとよいのだがと思いノートしてみた。さて、果たしてどうか。

※ 拙稿を書くにあたって川端和治氏の「放送の自由―その公共性を問う」（岩波新書）を再読した。全てのページに傍線を引くことになってしまった。放送法の成立経緯、放送法の構成と法としての意味、放送における自由と自律などなど、について明晰且つ簡潔に書かれていると同時に、放送への「厳しい視線」と「可能性への熱意」が隅々まで行き亘っている。多くのことを教えて頂いた。深く感謝します。

数年前(2018)、政府の「規制改革推進本部」の答申について次のように書いたことを思い出した。（「放送人の会」会報No61. 2018. 6. 以下、一部補足訂正省略）。

[1] 政治的公平問題へのアプローチ

（略）「さて、政治状況の反映だろうか、「規制改革推進会議」の答申に「放送法4条」2項「政治的公平」規定の廃止は盛り込まれないことになった。（略）

「放送法4条」の論点の持つ意味は大きい。放送法と憲法の関係という観点からも、またインフラとコンテンツという今となってはいささか新鮮味が欠ける問題や「通信の秘密」と「表現の自由」という極めて原則的な論点としても、はたまたNHKと民放という何度も繰り返されてきた関係論としても、〝それ〟について語ることはできるだろう。何よりも、『『政治的公平』』規定にはそれなりの意味がある」と放送事業者が言った途端に、それを罰則規定として認めるのかという反問があり、政治的にはそのように作用するであろう。狡猾な仕組み、仕掛けである。

「政治的公平規定（フェアネスドクトリン）」に拘らなくてもよいのではないか、という考え方もありうる、というよりそれがこの議論の「意図」ではないか。「政治的公平」規定が必要だと事業者がいうことは、言論機関が自ら規制を求めることになり、それは自己矛盾ではないかともいえる。

しかし、現代社会ではあらゆることは政治的力学（磁場）から逃れられない。すべては政治的ベクトルの中にある。この問題の議論も真空地帯で行われるものではない。「狡猾な仕組み、仕掛け」といった所以である。

規制緩和論から見れば、放送用周波数も民間が使用すればそれは［経済財］であって、市場原理に委ねられるべきであり、それを通信と区別する理由はなく、したがって規制原理も経済原則に委ねられるべし、ということになる。しかし、こうした政策そのものが極めて政治的なのであって、例えば「政治的公平性」は規制緩和という経済原則から見て不要であるだけでなく、それを撤廃することで政権による政策とイデオロギーのための情報機関の〈場〉を放送波に与える仕組みとして機能する。では、反政権にも同様の〈場〉が与えられれば公平ではないかと言えないだろうか。確かに、それこそが「政治的公平」＝規制撤廃論の意図であろう。

あらためて「政治的公平」規定の意味は何か、何故それは必要なのか、そこから考えるしかない。

放送法4条2項（政治的公平性）」問題へのアプローチにおいて重要なのは、この法の理念＝存在理由を踏まえることであろう。この4条は理念規定であり、**「公平」とは権力との距離の明示＝権力の広報機関の拒否**ととらえることが出来る。私はそう考える。

4条は、1条の放送法の目的を受けて構成されているのであって、1条2項「放送の不偏不党、真実及び自律を保障することによって、放送による表現の自由を確保すること」に対応する。

註：ここでいう「真実」とは客観的事象というより、「真実」を追求する過程（例えば取材の自由を含む言論活動を言う、のだと私には思える。

「異なる政治的主張」については、4条4項で「意見が対立している問題については、できるだけ多くの角度から論点を明らかにすること」とある。この項もまた「政治的公平性」を重層的に構成していると読めるであろう。

そのうえで、1条2項に「自律」とあるのは、4条の各規定は放送事業者が自ら律するものであるという意味と解することができるのであり、そこに4条が倫理規定とされる根拠があると思われる。私は法の専門家ではないが、その程度の理解はできる。

あえて繰り返せば、「政治的公平性」は放送法の基本概念を構成するのであり、それは放送事業者が自律的に実現すべきなのであって、その撤廃は権力によるメディアへの介在を許容することになる。自分の意見・思考に沿った情報だけを選択する傾向は、ネット社会になって顕著になっているが、世界には多様な意見があり、それを認識することこそ多様性と共同性を成立させるために欠かせない。放送における「公平」とは、**権力との緊張関係の下での多様性を自ら確保することなのであろう**（傍線筆者）。その意味でも、「政治的公平」は規制というより理念なのである。

言うまでもなく法は社会的拘束力を有するが、その前提として法の理念＝存在理由がある。放送法はその基本において極めて理念型の、すなわち戦後民主主義における典型的な法であり、憲法理念がまことに直接的に反映されている法なのである。ということは、放送法の存在そのもの、その基本理念それ自体が「戦後レジームからの脱却」とバッティングするのである。

「政治的公平」規定が必要だというときに、テレビというマスメディアがその優位性（社会的に有力な存在と認められている）を保持するための主張ではなく、原理的な問題として捉え返さなければならない。そうでないと、マスメディアのエゴとされるであろうし、「狡猾な仕組み、仕掛け」にはまるであろう。

[II] メディアとしての放送
その機能と公共性

しかし、この問題を巡る議論として、こうした政治力学や法的・あるいは制度論的アプローチではなく、放送というメディアの構造、在り方など、メディア論的と言ってよいであろう問題の提起が希薄なのが気になる。では、私たちにとって一体何が語られるべきなのだろう。いくつかの**論点になるべき点**を取り上げてみよう。

①マスメディアは近代社会の登場に深く関わる。市民社会が旧権力と戦うために手にした「言論表現の自由」の意味は大きい。

②同時に、その市民社会は国民国家という形態と二重構造を形成し、そこでは近代的メディアは「共通の言語空間の形成と維持」という機能を果たしてきた。そこにナショナリズムが成立する。

③表現の自由（市民社会）と共通の言語空間（国民国家）との関係（乖離）＝二重構造にメディアはどう関わるのか。

③放送は周波数管理（免許制度）体系の下に置かれる。それは周波数の希少性や混信防止という技術的理由によるものだけではなく、情報のライブ性（同時性／共時性）というメディア特性による。国家は時間管理の危うさを先験的かつ先見的に察知していたのであろう。

④放送法体系が施設（無線局）免許（ハード規制）を基に構成されているのは、憲法における「表現の自由」との関係を法技術的に巧みに取り込んだものであると思われる。番組編集に対して間接規制であり、無線局としての免許主体である放送事業者が番組編集責任を負うとされたのである（ハード・ソフト一致原則）。その意味を踏まえて〈4条問題〉は論じられなければならない。

⑤このように放送は構造的に規制が組み込まれている。しかし、だからこそ〈自由〉の意味をさらに深く問い返すことができるはずである。無条件無前提の自由は存在しない。

⑥放送は公共的な存在だと放送事業者は言い、またそのように受け止められている。その理由は何か。しばしば「公共の電波を利用するから」というのがその根拠とされる。しかし、それはほとんどトートロジーである。一方、〈規制緩和〉の立場からは、放送も市場原理に委ねられるべきであり、市場が最適解を導くであろうと語られる。しかし、放送において市場が最適解を出すとは限らない。放送の公共性は人々の共同性とともにあり、それを基にして行為として示されるべきであろう。

⑦放送は、同時的により多くの人々に情報を伝えることができるメディアである。しかし、そうしたメディア特性はネット系の技術進歩とその社会的定着により、相対的なものになりつつある。こうした状況で、放送メディアが「これこそ放送の根底にあるもの」だというべきは何かといえば、それは〈情報編集責任〉ということになる、と私は考える。

権力がメディアに対してフェイクニュースという言葉を投げつけるこの時代において、情報編集責任とは何か。

⑧「メディアは出来事の一部であり、テロの恐怖の一部であって、双方に作用しているのだ。」と語ったのは、ジャン・ボードリアールである。（『テロリズムの精神』季刊「環」8巻藤原書店 2002.）また、鷲田清一氏は「テクストの外などというものは存在しない」というジャック・デリダの言葉を引きつつ、「いかなる歴史的事実も語られたもの、つまりはテクストとしてしかありえない。事実は解釈され、編集されて伝えられる。」（「折々の言葉」朝日新聞 2018.3.3.）と書いている。

⑧〈事件〉があり、それを「客観的」に伝えるのがメディアの仕事、というわけにはいかない時代に私たちはいる。情報編集責任とは、そして放送の公共性とは何か、いまあらためて放送メディアが自らに問うべきなのだ。それが、メディアの自立であり自律であろう。そこから、状況と制度への問い返しが始まる。

2023 年の現在、この5年前のノートを読み返し書き足しつつこれを踏まえてさらに何を言うべきかを考えている。

[III] 放送は何故公共的なのか
―放送とは深く技術と制度に依拠したシステムである

私が放送制度について向き合うようになったのは、1984 年にメディア企画というセクションに異動になってからのことだ。それまで番組制作の現場では、放送制度について考えたことなどなかった。メディア企画部門は、当時ニューメディアと呼ばれていた放送波を利用した新しい事業についての企画開発を業務としていた。だから、何よりもまず技術の基本を学習しなければならなかった。技術出身の、それまで縁が深かった制作技術の人たちとは違う発想と経歴を持ったメンバーに放送技術の初歩から教わった。技術には規格というものがあり、伝送規格とスタジオ規格があって、国際的な取り決め＝［標準化］しないとどの国も利用できないのであり、国際標準の作業は国（郵政省）が対応しているのだが、その実務は放送事業者（主に NHK、場合によっては民放のスタッフが国際会議のメンバーとして参加していた。TBSにも国際会議に参加する技術者がいて、彼から放送技術の国際的な仕組みや放送と通信の国際的な仕組みの違いを教示された。テレビ画面の走査線数や 1 秒間の画の数、アスペクト（面の縦横）比のこと、日本の規格はNTSCと言って北米規格と同じであること、NTSCとは National Television System Committee、の略であり、ヨーロッパはPALであることなど。海外の国際機器展などに参加する機会があり、それまで知っていたテレビとは全く違う世界があることを知って感心したり驚いたりしたものだった。高品位テレビと言われていたハイビジョンの企画開発が主に私の担当であり、NHKとの関係も密になった。技術研究所という私と縁が薄かった人たちやニューメディア推進本部の幹部たちとも懇意になったものだった。時代は衛星放送の開始を迎え、民放のBS参入が大きなテーマになっていた。

そんな日々を過ごしているうちに、TBSでオウム事件」が起こる。私はすでに現場とは縁が切れていたのだが、BSやハイビジョンの関係で郵政省との接点があり、何人かの官僚たちとは一定のコミュニケーションが成立していたこともあって、オウム事件の対策チームに加わることになった。

「事件」の何が問題か、放送行政上の対処の仕方あるいは国会ではどういう対応を求めれるのか、という問題はひどく緊張を強いられる作業だった。オウム事件で私が学んだことは多かった。何よりも、「放送法とはいかなる法であるか」ということをその基本から考

えさせられた。また「役人(官僚)の存在、その役割について私たちは本当に何も知らなかった」ということも痛感させられた。特に、政と官の関係(そのメンタリティーの違い)などを知り、その上で社長が国会の参考人招致でどう発言するべきかなどを通して、放送がどのような目線と力学に晒されているかを実感した。番組審議会が放送法上どのような意味を持つ機関なのかも初めて知った。それまで放送局にとって免許問題は、送信技術者の再免許申請書類の作成業務だった。その後、私は社内に新設された「放送と人権特別委員会」(委員長堀田力氏)の委員になった。

その嵐のような日々の後、私はBS参入問題担当の後、地上波テレビのデジタル化を担当するようになり、民放連や総務省の検討会のメンバーとしてかなり忙しい時期を過ごした。放送と通信の区別さえ知らず、放送の原則は「表現の自由」、通信の原則は「通信の秘密」という基本原則から教えられた。マスメディア集中排除原則※や区域外再送信問題など、地上放送の根幹に関わる制度についてイヤでも学習することになる。その時の私の基本スタンスは、デジタル化は不可避だが、事業者は国の政策に取り込まれる形で将来を選択してはならず、「自ら判断すべし」ということだった。政策(あるいは行政)と事業者の関係を私なりに真剣に考えた。しかし、官僚はそうした反応を織り込みつつデジタル化を政策として仕上げたのだった。

法制度について官僚と議論しているときに、「法の解釈は行政=国の権限です」と言われて憮然としたものだった。

※「マスメディア集中排除原則」は郵政省令「放送局開設の根本基準第9条」に規定されていたのだが、極めて重要な規定が法律ではなくて省令であることに疑問を持って担当官と議論したことがあった。

こうして私は、放送にとって技術と制度の両面が如何に重要かということを学習させられたのだった。

[Ⅳ]「放送とは、周波数というキャンバスに情報という絵の具で絵を描くことである」

そのような経験の中で、常に「テレビの在り方-テレビはいかなるメディアか」ということを考えていた。

例えば、こういうこともその一つだ。

電気通信は全てそうだろうが、放送は記録より伝送が先行して成立した。そこが、写真や映画とは異なる。それは、言語と文字の相違のようなものかもしれない。印刷や写真のように、記録された情報が複製技術により多量に頒布されることで社会に大きな変化をもたらしたメディアと、放送のように同時性・同報性を出自のときの条件とし、記録や蓄積が後から登場したメディアでは、何が違うのか。「融合」状況において、この二つのメディアの系譜の相互乗り入れが進行しているが、この違いは今でも意味があるのか、ということを考えた。

「放送の公共性」が公理ではなくて定理だとすれば、この「違い」は放送の存在証明のためのメディア論的根拠になるのではないかと考えてみた。

電気通信の歴史を検証する必要があるが、まず「周波数」が発見され電気信号の伝送が可能になった。あるいは、逆かもしれない。電気信号の送受信が周波数の存在を証明した。いずれにせよ、周波数を利用した無線通信が登場する。これを何に使うのか、人は当然それを考える。すぐに思いつくのは、遠隔地の商取引のための情報であり、もう一つは軍事利用だろう。例えば、明治維新後僅か10年の西南戦争で既に電信が利用されていた。

ある周波数帯域で強力な送信装置があれば、広範囲の送信が可能であり、個別の受信コストは小さくてすむということが理論的かあるいは経験的かは知らないが、判明する。そうなれば、より多くの人が知りたい(より多くの人に知らせたい)情報伝送の仕組が社会システムとして成立する。そこで、ニュースやエンタテイメントとしての音楽の伝送が業(商売)として成立し、放送局が誕生する。その時代には、電話やレコードそして映画など様々な情報の記録や伝送の発明・発見が同時進行していただろう。それらも、それぞれの業として成長してきたはずだ(参考:「メディアの生成-アメリカ・ラジオの動態史」水越伸・同文社)。

こうして、放送は「周波数を利用して、情報をより多くの人に届けようとして、様々にデザインする」ようになる。それが面白くないはずがない。コピーしなくても瞬時に沢山の人々(大衆)に情報が伝わるのだから。この、いわば放送のDNAは伝送路や受信端末の多様化の中で、放送特性として重要なポイントになる。

現在ネット上で日々多種多様な情報が交換され更新されている。ネットでも情報は様々にデザインされているということだ。そうだとすると、〝そこ〟に「違い」はあるのかないのか。違いがあるとすれば、一つはデザインの相異である。テレビCMとネットCMのように、デザインはメディアで異なる。この差は媒体特性の差と社会的認知の条件の差であろう。周波数上の情報として、同時性・同報性という特性を原初とするメディアのデザインが、放送情報の原点である。

「あらゆる情報端末に、放送情報を」というのが放送事業者の基本スタンスだが、例えば放送情報をネットに送り出すことは、二次的利用か、あるいはネット用に再デザインするか、の問題だ。最初のキャンバスは飽くまでも周波数なのである。**キャンバスと絵は分離できない。**それは制度の問題ではない。そのことの意味をもう少し掘り下げてみたいと思う。それは、「テレビジョンとは何か」「テレビに何が可能か」という問に回帰することでもあるだろう。

所謂地デジ問題で委員会の座長だった村井純氏に「放送事業者にとっての地デジ、放送の基本的考え方の原点」というような話をしたことがあって、「テレビの人が何を考えているか、よく分かりました」と言われたことがあった。その会話は私にとって刺激であり励みにもなった。

※テレビジョンのメディア特性=「テレビとは何か」について私が初めて意識したのは、入社して数年後に経験したTBS闘争の渦中であった。

[Ⅴ] 放送の公共性は定理であるが公理ではない

ところで、何故「放送は公共的」なのか。このことに応えるのは実は容易ではない。周波数の使用を免許されているからなのか。免許事業として「あまねく普及」に努める義務を負うからなのか。事業として表現の自由を保障されているからなのか。非常災害情報を提供するからなのか、そして「社会的影響力が大きい」からなのか。

メディア環境が急速に変化しつつあり、「融合」論が一斉を風靡?している中で、放送事業者自身が放送というメディアの存在そのもの根拠を問い直し、放送というシステムの社会的意味を提示するという、些か厄介な仕事が求められている。これは、他者には任せられない仕事である。

放送の公共性は定理であるかもしれないが、

公理ではない。デジタルとインターネット(の登場)は、放送における定理を成り立たせてきた条件の変化なのであって、従って放送の存在理由のためには新たな証明が必要なのである。

制度上地上テレビ放送は「基幹放送」と規定され、地上放送事業者は、自らもそのように自認している。それは、他のメディアと比較してより多くの規制を引き受けることである。市場経済論の立場からは、何故規制を求めるのか理解できない、基幹メディアから解放されればより自由な表現が可能になるではないか、という声もある。このことにも答えなければならない。

情報通信分野が成長し工業資本主義から知識産業型の資本主義に転換する必然性と、そのための規制緩和政策の一般的必要性は否定できない。そうだとすると、放送はそれにどのような関係を構築すべきだろう。「オレ達は特別だから放っといてくれ」といえば済むとは思えない。〈自前〉の論理構築が今こそ必要なのである。それは、現実的「解」とは別に、これからの放送のあり方の問題として、私たちが引き受けるしかないのである。何故ならそれは自身の行為で答えを出すしかないのだから。法制度や周波数の有限希少性や社会的影響力のような与件の理屈に頼るわけにはいかないのだ。まして、**権力から「免許付与」と引き換えに「公共性」を認知されることに寄りかかってはならない。**

(TBS メディア総研・メディアノート No.104. 2008. 8. 15.〔情報をデザインする〕一部改訂)

【Ⅵ】放送法第1条の淵源 放送法の成立と敗戦・戦後の意味

「この法律は、次に掲げる原則に従って、放送を公共の福祉に適合するように規律し、その健全な発達を図ることを目的とする。」

その法の目的に「民主主義の健全な発達に資する」と明示的直截的に書いてある法律は他にあるのだろうか。

何故このような法が成立したのだろう。まさに戦後民主主義とともに放送法は生まれたのである。私たちはここから「放送法の成立と「敗戦・戦後」の意味」を考えるという放送制度論を超える問題に踏み込むことになる。それは、民主主義のとらえ返しにつながる。

放送法の成立過程についていくつかの考察があるが、それは憲法の成立過程と歴史的にも構造的にも不可分であることが分かる。

占領下の政治過程の最大の焦点は天皇制の維持と戦争の放棄であることは既によく知られているとおりである。その政治的力学の焦点(あるいはブラックホール)は「憲法押しつけ論」に集約される。

「憲法は権力を縛る」という認識が合理的でありながらそれが私たちにとっていま一つリアリティーに欠けるのは、現憲法の成立への私たちの関わり方について**身体的記憶**が薄いからだと私は思ってきた。「押しつけ論」に対する反応において、どこかでそれを否定しきれないところがあるのだ。

その憲法の成立過程と放送法の関係は、この放送法第1条に集約されている。

※ フランスの「人権宣言」やアメリカの「独立宣言」のように人民の血で購われたものではない

※ 憲法9条はGHQの発案ではなくて、日本側の提案(幣原意見)だという検証があるが、そうだとしても憲法全体は戦後処理という力学の中で連合国の意思によって提示されたものであると考えてよい。

※「押しつけ論」をイデオロギーのレベルを超えて実証と批評の水準で語ったのは江藤淳であるが、これを同じ文芸批評の視座で鋭く批判したのは加藤典洋であった。私は加藤典洋の指摘に強く同意するのだが、その先にあるのはいかにして「憲法」を身体化しうるとかいう問題であり、それは戦後の、恐らく1960年代までのこの国の優れてアクチュアルなテーマであったに違いない。いや、今でもそうであるべきだ。

※「八・一五のとき、人民政府樹立の宣言でもあれば、たといかぼそい声であり、その運動が失敗したとしても、今日の屈辱感は幾分救われたであろうが、そのようなものは何もなかった。高貴な独立の心を、八・一五のときすでに、わたしたちは失っていたのではないか。」(竹内好「屈辱の事件」『世界』一九五三年8月)・鶴見俊輔「竹内好 ある方法の伝記」所収 p153.

※ ここまで書いたところで「憲法の無意識」柄谷行人(岩波新書)を読み始めた。また新たな憲法論に出会っている。

【Ⅶ】放送法の骨格あるいはポイント

放送法成立の意味は多岐にわたるだろうが、特に以下の点が焦点だろう。

① 日本放送協会=NHKの改革

現行放送法のページ数の多くはNHKに関するものである。それだけ放送の国家統制(その項点としての「大本営発表」)から情報を解放することは、GHQにとって戦後民主主義政策の重用課題だったのだ。戦後の放送法はここからスタートした。受信料制度公共放送であることの財政的根拠の制度化、もここからスタートしている。では、今NHKは放送法の趣旨に沿って存在しているだろうか。

② 民間放送の誕生

放送法においてNHKに関する規定が多いとはいえ、民間放送に関する制度が示されたことは、やはり重要な戦後政策である。NHKではない放送局の誕生は民放の出自としてその後の放送の構造に大きく関わる。多源性、多様性、地域性は民放の三原則だ。今、民放は自身の出自の理由を承知して機能しているだろうか。

※家庭におけるラジオの存在は大きかった。とある日、父が「今日から民間放送というラジオが始まるよ」と教えてくれたことを私は覚えている。

※民放のネットワークは放送局の自主的システムとして立ち上げられた。それを支える「ネット分担金」などの仕組みは、放送事業者の知恵である。

③ 放送法と電波法の関係

放送法審議の過程で、放送法違反が電波法76条により停波の対象にすると修正された。構成として電波法が上位であり放送放は下位という位置づけが読み取れる。そもそも、「放送」とは、公衆によって直接受信されることを目的とする「無線」による送信だった。放送法改訂により「無線」は「電気通信」と規定された。

放送局の位置は無線局免許であり、所謂ハード規制の対象である。但し、無線局免許である放送事業者が番組編集権を有するということは、事業免許による認可ではないので、国による編集行為への直接的関与が避けられているというともいえる。この点も、私が担当者であった時に行政との議論の論点でもあった。

※. 行政機関(郵政省)として放送部門が組織(内局)として独立するのは 1984 年

と遅い。

④　放送法の成立と深く関係して検討されてきた独立行政法人としての「電波監理委員会」は占領が終了するとともに廃止され、電波法と放送法は内閣を構成する郵政省の権限になった。

いま、「放送法」について4条問題が焦点とされているが、放送行政あるいは電波行政の国=行政機関からの解放(独立機関化)をもう一つの軸として考えるべきだ。放送事業者はこの論点を強く意識すべきであろう。

ＧＨＱの占領政策とそれをもとにした戦後政治の重要課題の一つとして放送法は成立した。そこには憲法制定との関係が様々な政治状況に働く力学が明瞭にあるいは複雑に反映されている。

【Ⅷ】放送法を超えて　補助線の思考

①　シンポジウム「戦争とメディア　21世紀の世界と日本国憲法」で教えられたこと(学問と表現の自由を守る会・日本ジャーナリスト会議)。パネリスト加藤陽子(東大教授・日本近現代史)、青木理(ジャーナリスト)、高橋純子(朝日新聞編集委員)、高橋朝穂(早稲田大学教授・憲法学。5/14 渋谷LOFT9)

このシンポジウムの私にとっての最大の収穫は、加藤陽子氏の問題提起の中で〈ＧＨＱの顧問で憲法制定に関わったＣ．ファースの大学時代の師であるＫ．コールグローブは、戦前東大で美濃部達吉の憲法講義を受けていて、後に美濃部の『逐条憲法精義』の英訳を亡命していた大山郁夫に依頼していた〉という関係を知ったことだった。

※参照「象徴天皇制の起源 アメリカの心理作戦『日本計画』」(加藤哲郎 平凡社新書 2005)

この話にちょっと感動した。というのも**「民主主義　文部省著作教科書」**（角川ソフィア文庫)を読んだとき、私はこう書いたからだった(放送人ブログ)。この本はもともと1948年に中高生対象の教材として文部省から刊行された。

「これを書いた人たちは、どういう人なんだろうか、と思った。文庫本として再刊された解説で、内田樹氏が言っているように、ＧＨＱとの微妙で且つ緊張した関係の下で書かれていることは確かだろう。しかし、これは与えられた資料の翻訳ではない。一読すればそれは分かる。書いた人たちの熱意がそこにはある。では、この人たちはどのようにしてこのような認識に至ったのだろうか。一方では、美濃部達吉の天皇機関説を軸にした思想(学説)と歴史認識があり、加えて民主主義についての原理的歴史的考察がある。戦前日本の知識人たちの思考の系譜が地下水脈のように流れていたのだろう。

そうだとして戦時下彼らはどのようにしてその時代を過ごしていたのだろうか。これを書かせた情熱として、それを読み取ることが出来るように思う。

それにしても、これが「文部省 著」の教科書だったことに驚き、感心する。どのページでも開くと良い。現在のこの国の状況を思うと、絶句する思いだ。

『「もしも国会以外の機関、特に行政権だけをつかさどっているはずの政府が立法権を持てば、国民の自由と幸福とは、政府の独断によって左右されることになる。それは独裁主義の最も著しい特色の一つである。」』(p317 傍線引用者)。

閣議決定による法の解釈変更などあってはならない。」

戦前日本の知識人たちの思考の系譜」の「地下水脈」は、アメリカにも流れていたのだ。戦争末期「総力戦」といわれた状況下で尾崎秀実や三木清のような行為が氷山の一角のように浮き上がるのもこうした地下水脈があればこそであろう。

加藤陽子氏の問題提起を聞いて「ミッシングリンク※が繋がった!」という思いだ。

※ 類人猿とホモサピエンスの進化を証明する化石の存在

②　国家と「私」

「放送人の世界・〝相田洋(ユタカ・ＮＨＫドキュメンタリー制作者)　人と作品〟」で旧満州引揚者の相田氏は**「あの時、国は人々を棄てたのだ」**と語り、その思いから、引揚者への拘りがモチベーションとなって「解体～興安丸の一生」（1971）や「移住31年目の乗船名簿」、そして「母と歩いた道」（これは、母の介護と満州生活や引揚体験を重層的に記録した作品)を制作したという。相田氏はその多くの仕事、例えば電子技術も自動車も、そういう思い(国は人々にどう関わってきたのか)でドキュメンタリーを制作してきたのだ、と。

この相田氏の発言を聞きながら私が思ったのは、「戦後入門」（加藤典洋　ちくま新書)の一節だった。

(大阪空襲で逃げ回った時、そうして多くの死者とともにあるときに) 少年・小田実(まこと)の中に生まれた) **個人と国家の乖離の意識**について、加藤典洋はこう書いている。

「そのときの国家原理は『大東亜共栄圏』であり『天皇陛下』でした。戦後、それは『自由』と『民主主義』に変わります。でも、戦後も、その新しい国家原理との間に、『くいちがい』の感覚は消えずに残った、そう彼は述べるのです。」(p331)

そして、その感覚（国家に担われた〈自由と民主主義という国家としての普遍原理〉と個人との乖離）が小田実におけるベトナム反戦につながっている、と。

何よりも**「個人は国家に包摂されてはならない」**と小田は言っているのだと私は思う。それは、私にとっても政治と思想の始まりなのだ。

以下、少し回り道だが、この問題についてもう少し書いておきたい。

加藤典洋は「敗者の想像力」（集英社新書)でこうも書いている。

〈「戦後は敗戦ショックで見失われ」た「戦時下の、誰もが苦しんでいた時期の、知的感受性の歴史の水脈」について、「戦前昭和の公的言説体系は、そうした感受性を挫折に追いやる方向で構築され」たが、「それは方向を変えて戦後にも生き続けた」。社会の公的な「善」の基軸は「八紘一宇」から「世界平和」に転換したが、それをヒエラルキーの頂点とする善悪二元論のもと、それに跪拝しない「控えめで壊れやすい」知的感受性を抑圧する構造は、一貫して変わらなかった、と山口※は見る。〉(p140)。

※ 山口昌男　「『敗者』の精神史」
「『敗者』の昭和史」

そうか、私が加藤典洋を評価するのはこうした国家との距離の確認なのである。地下水脈の重要性を認めたうえで、その時思想のオリジナリティーとは何か。

私たちは、「あの戦争」を歴史としてどのように体験し、どのような意識をそこから形成してきたのだろうか。

直感的に言うならば、生活者レベルにいては被害意識として記憶されているのであろう。私の年齢であれば、ほとんどの家族近親者に

戦死者、戦災者、抑留者がいるだろう。そこに「戦争は軍部が引き起こしたのだから、国民は被害者」であり国民三〇〇万人が死亡したのだ、という認識が重ねられる。そこからは、アジア太平洋戦争の二〇〇〇万人(と言われる)の死者という意識は生まれにくい。加害者としての発想は遠ざけられていったのだ。

例えば、かつて私はこう書いた。

『日米開戦回避のための工作は、双方からギリギリまで行われていたという記録が明らかにされて来た。(略)歴史に〈if〉が許されるとしたら、次のようなことを考えてみてはどうだろう。若し、そのような和平工作が成功していたら、数百万の犠牲者は救われ、産業や文化の破壊・消耗は回避されたであろう。だが、そうであったとして、私たちはどのような時代を〈今〉として生きていたのだろう。欽定憲法による絶対天皇制国家は継続し、大日本帝国の強大な軍事力の下での平和を生きていたのだろうか。さすがに治安維持法はなくなっていたかもしれないが、朝鮮半島と台湾の独立闘争は間違いなく激しく起こっていただろう。で、中国東北部(旧満州)は?

そのような歴史のifを考えることは許されると思う。その延長上に、「日本人は自ら「違う選択」をする力があっただろうか」という、さらなるifが来る。

だから、私たちは一九四五年の敗戦をどう引き受けるか、というところから考えるしかないのだと思う。その引き受け方に決着をつけていないところに、つまり敗戦に至る近代の破綻の仕方に決着をつけていないところに、この国の、そしてこの国に生きている人たちの現在がある。』

そう、私たちはチャンと負けていないのだ。そこをはっきりさせないから東京裁判をチャラにしようというハナシになる。「一億玉砕」が一夜にして「一億総懺悔」に代わってしまったその変わり身の中で、そして敗戦後の表層雪崩のような思想転換の中で、その底流にあった「近代前期」の歴史的意味を確かめることを私たちは放棄してきた。その付けが今来ている。だから、くどいようだが「近代の超克」に拘るのだし、その延長の「近代の超克の超克」が思想テーマになるのだ。戦後民主主義のプラス価値を私は高く評価する。だからこそ、それを一つの伝統=歴史の成果とするためにも、戦後思想の知的営為を継承しなければならないのである。

このようにして、一億玉砕が一億総懺悔に転化する過程において「放送法」は成立したのだった。**その意味を放送に関わるものとして考え続けなければならない。「放送法」4条問題は、そこから始まるのではないか。**

③ 戦後あるいは敗戦について

鶴見俊輔は「日本思想の可能性」(初出1964.1)で「このように書いている。

「国家の計画に加わっていたかいないかを問わずに、日本国家の内部に、日本国家がこれこれのしかたで抵抗に会って戦争に失敗し、その失敗の結果としてこれこれの目標が達せられると計算して、この国家目的に参加した人がいるならば、そういう人にとっては、戦後日本の発展も、戦後のアジア・アフリカ諸国の解放も、みずからのプログラムのうちにふくめられたものとして考えられると思う。尾崎秀実を、そういう思想を持った人の実例としてあげたい。」(p17-18)

「戦後の日本は、戦争を放棄したその憲法、徴兵制度を持たない国家のかたちを、十五年戦争の避けがたい遺産として引きついだ。あの戦争の敗戦のしかた、占領のされかたのゆえに、みずからふかく問うて異議を申したてるひまのないままに、今の憲法と国家のかたちを持つようになった。そのかぎりにおいて、戦後日本の国家という制度の中にふくまれた思想は、十五年戦争の結果の一部であると考えることができる。」(p19)

加藤陽子氏が提起した「地下水脈」は、戦前日本において「表の美濃部・裏の尾崎」として流れていて、戦後民主主義はそれをきちんと受け止めていないのではないか。そこに近代日本政治思想の挫折と生産性が集約されているのだと、私には思えるのだ。

事の序にもう少し脱線すれば、私は今改めて尾崎秀実の転向調書(上申書)の真意を知りたい。吉本隆明の転向論には多くのヒントがあるがどうなのだろう。転向論は学生時代以来の、そして私の最初の思想的関心事だった。何故思想の位相に変化が起こるのか。「思想の科学」はそれを〈権力による強制〉とした。吉本隆明は大衆との乖離といった。そうであるとして、そこに思想の生産性はあるのだろうか。

「敗者学」に惹かれるのもそういうことだ。

「1931 年から 1945 年にかけての戦争時代をどう見るかは、現代の日本人にとって思想構成上の一つの試金石である。この時期につまらぬことを言ったり書いたりしたと思って、この時代の自分の生活と思想をケシゴムで消すように消しさろうとする人は、思想の根を深く自分の中におろすことはできない。」(鶴見俊輔「日本思想の可能性」・「日本思想の道しるべ」所収 p39)

[Ⅸ] メディアと国家 近代メディアの二重性について

こうした回り道をしながら、私は「戦後民主主義あるいは民主主義を無条件に思考の前提にして良いのだろうか」、と考えている。例えば、政府が言う「(G7の)共通の価値観」について、私たちは容易に Yes と言ってしまってよいのか。

全体主義や専制主義よりそれは意味のあるあるいは価値のあるシステムであるのだろうが、では私たちは、どのように民主主義を「主体」として意識しているだろうか。所与の条件として無前提にそれを受け入れることは、「押しつけ憲法論」への対応とどう違うのか。憲法について身体的記憶が希薄であるというのは、そういうことであるまいか。

同じように、放送局の経営者も制作者や記者たちも「放送法」についてもわが身の外の仕組みとして受けとめているのではないか。私はその疑問を晒してみることから始めるべきではないかと思っている。所与の条件とは、自身の外にあるのであって、そのこと自体を選び直すことは出来ない。歴史とはそういうものであろう。しかし、その意味するところを選び直すということは、自身の手でそこに必要な何らかの意味を付与する、あるいはその上に立って「そのような」意識を構築することである。そのためには相応の知的労力が欠かせないのであって、「身体化」とはまさしくそういうことなのだ、と私は考える。「わが身の外の公的言説」からわが身を解放しなければ、法(=放送法)を論拠に権力に向き合うことなどできないであろう。

繰り返すが、だから「個人は国家に包摂されてはならない」のである。

マスメディアは、近代国家が先行する既存の国家権力への異議申し立て(言論表現の自由)を本来的機能として求められるとともに

に、その近代国家が国民国家としての統一性のための「物語」形成の役割を求められる（「想像の共同体」アンダーソン）。共通の言語意識空間生成のためにマスメディアは機能する。

メディアと国家の関係は個々のジャーナリストの意識の問題としてではなく、あるいは経営体としての必要条件としてでもなく、出自の時からこの**背反性**を抱えているのだ。組織内ジャーナリストの困難性は良心の問題ではなく論理の問題として受け止められなければならない。これは他人に答えを求めるわけにはいかないのである。だからこそ、（繰り返すが）メディアは「自由」を根底から意識化し対象化して問いかえすことが出来るはずだ。自虐的に言うのではない。「無条件の自由」というのはありえないのだから、いかなる制約で自由を対象化するかということこそが大事なのだ。ＮＨＫであれ民放であれ、「免許制度であればこそ」放送の自由を根底から問いかえすことが出来るのである。

【X】「オレたちの放送法なんだぜ」

言論に関する法は、規制のためのものではなく権力との距離を自ら確保する根拠として存在する。放送法はそのようなものとして読み、それを放送事業者の足場として放送の思想を再構築するべきなのだ。

そのようにして「今」メディアと国家の関係は存在する。

放送法４条問題の基底にあるのはそういうことなのだ。

「放送法はその基本において極めて理念型の、すなわち戦後民主主義における典型的な法であり、憲法理念がまことに直接的に反映されている法なのである。」と書いた。ではなぜそのような法が成立したのか。そこに如何なる力学が働き、そこにどのような思想の生産性があるのか。私たちはそこまで立ち返らなければならないのだ。それが、放送法を今考えるということであり、根本から考えるということなのだと思う。そのためには「自立と自律」が必要なのである。高橋源一郎氏の言葉を借りれば**「オレたちの放送法なんだぜ」**と言ったところである。

「放送人は何故放送法について語らないのか」という問いかけに答えるのは容易ではなかった。

拙い思考と乏しい経験から語るには限界がある。ただ、放送法を巡る議論や意見を読みつつ思うのは、「メディア（ジャーナリズム）の思想の行き詰まり」感を感じたのだった。私なりの思いを少しは語るべきだろう、という思いでここまで書いてみた。なんだか、切り張り細工のようなコラージュの要なものになってしまったなあ、と思うのだが私の力量は精々こんなところだろう。「放送法４条問題」を考えていたら随分回り道をしてしまった。でも、面白かった。遠回りも悪くない、それができるのも今のうちかもしれない。時代は〈戦前〉の思考（柄谷行人）が問われているのだ。

これが「放送人の会」としての私の最後の仕事になりそうだ。

放送局の経営者、管理職、社員、放送の世界で仕事をする人々は、然るべき段階（例えば、入社時点、管理職就任時、そして経営の立場に立った時）に放送法をきちんと読むべきだ。その際、川端氏の著書は絶好の解説書であり最適のガイダンスになるに違いない。

現場で仕事をしていると「忙しくて読んだり、考えたりしている暇がない」というだろう。が、たまには「読んだり考えたりに追われて現場に行く時間がない」とでも言ってみてはどうだろう。これはほんの冗談だが、少しは本音も混ざっているのだ。

【参考図書】

・川端和利「放送の自由　その公共性を問う」
・加藤典洋「９条の戦後史「敗者の創造力」「戦後入門」「９条入門」「アメリカの影」「日本という身体」「可能性としての戦後以後」「敗戦後論」「さよならゴジラたち」
・江藤　淳「閉ざされた言語空間」「一九四六年憲法　その拘束」「戦後と私・神話の克服」
・佐藤卓未「八月十五日の神話・終戦記念日のメディア学」
・孫崎　亨「戦後史の正体」
・小熊英二「民主と愛国」
・鶴見俊輔「日本思想の道しるべ」「竹内好　ある方法の伝記」
・美濃部達吉「憲法講話」
・風間道彦「尾崎秀実伝」
・河上徹太郎　竹内好「近代の超克」
・柄谷行人「無意識の憲法」
・方丈社編集部編「朝目覚めると、戦争が始まっていました」
・共同通信出版センター編集部「ポツダム宣言を読んだことがありますか」
・文藝春秋編「終戦の詔書」

☆　☆　☆　☆　☆　☆　☆

【第18回ラジオ聞き酒の会　実施報告
文化放送開局記念スペシャル
「S盤アワー解体新書」

田中　秋夫

放送人の会・ラジオプロジェクトが定期的に開催している「ラジオ聞き酒の会」は、コロナ禍の為しばらく開催を控えてきたが、下火になった7月12日に「第18回」を開催した。

今回取り上げた番組は、文化放送が開局70周年企画のフィナーレとして3月28日に放送した「S盤アワー解体新書」で、文化放送側から制作者の鈴木敏夫氏とラジオPから9人が参加し（特別ゲストとして元オールナイトニッポンDJの斎藤アンコー氏）同局会議室で実施した。

この「S盤アワー」は文化放送が１９５２年3月31日に開局したと同時に放送を開始した日本ビクター提供の洋楽番組で、今回の記念番組「～解体新書」ではこの知られざる経過を当時の関係者に詳しく取材して解明しており、大変興味深く聴くことが出来た。

文化放送開局の年１９５２年は、前年の９月にサンフランシスコ平和条約が調印され、翌年の4月に発効して連合国による占領が終わり、日本が再び主権を回復した年である。開局時の事業主体はカトリックの聖パウロ修道会が中心で、放送局名を「財団法人日本文化放送協会（ＮＢＣ）」と称した。「当時、占領政策の主体だったＧＨＱは日本が再び戦争を起こさないようにアメリカの文化を広める必要があると考えた。その為に新しく開局したラジオ局に洋楽番組を推奨し『S盤アワー』もその一つだった。」との分析も番組内で披露された。

番組の制作意図について鈴木氏は「自分の会社が生まれた時のエピソードを知り、忘れるなということを伝えたかった」と語った。また「制作過程は楽ではなかった。関係者はほぼ全員が鬼籍に入り、往時の事を語れる人は非常に少なかった。またこの番組制作の中心だった日本ビクターには資料が皆無だと告げられた。途中で制作を断念することも考えた」と言う。

当時の洋楽はコロンビアレコードが全盛期。

後塵を拝していたビクターの担当者、小藤武門は「ラジオという新しい媒体を使って広く宣伝しよう」と考え、自社制作の番組を企画する。最初は関東地区ですでに開局していた「ラジオ東京」に持ち込もうとしたが、コロンビアレコードが先に決まっていた為、断られる。そこで、次に開局することが決まった文化放送に企画を持ち込み了解され、夢が実現。

番組のＤＪを務めた帆足まりこ氏は、将来ラテン歌手を目指すビクターの社員だったのだが、小藤が彼女の才能を見出し、この番組のＤＪに起用したエピソード等も番組内で紹介されている。

この「S盤アワー」はスタートして間もなく関係者の予想も超える大ヒット番組となり、１９６９年11月までの17年間放送され、日本にマンボブームやプレスリーブームを作ってゆく。

番組では、「S盤アワー」でプレスリーを知り音楽の道を志した歌手の尾藤イサオ氏をはじめ、放送人の会のメンバーである浮田周男氏等、当時を知る数々の関係者たちのインタビューで番組の知られざる実態を紹介している。さらに「～解体新書」は「S盤アワー」の番組終了後、ラテン歌手を目指して夫とともにメキシコに旅立った帆足まり子の劇的な後半生についても紹介している。

この日の「聞き酒の会」は番組聴取後、浜松町の中華料理屋に席を移して懇親会を開いたが、参加者たちは、この番組の制作者である鈴木氏をはじめとする若者たちが70年前の番組「S盤アワー」を掘り起こしてクローズアップさせた努力を称賛すると共に、若い頃に聴いた「S盤アワー」等の「ラジオデイズ」について談論風発、熱い会話が交わされ、瞬く間に時間が過ぎていった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

総務委員会からのご報告

総務委員長　小川　和之

放送人の会の事務局のある千代田放送会館に隣接する赤坂プリンスクラシックハウスの薔薇の花も見事に開花し、あたりの草花もだいぶ秋めいてまいりました。

これまで3年余りに及ぶコロナ禍の中で何とか事業を進めてきた放送人の会は今年度二年ぶりの理事改選を行い、新しい体制の下で思いも新たに活動を開始しています。

新型コロナが五類に移行したとはいえまだまだ油断はできない状態が続いていますが、今年度はこれまで開催を断念せざるを得なかった会員相互の情報交換や親睦のためのコミュニケーションの場を積極的に進めていきたいと考えています。

昨年年末に実施しました3年ぶりの放送人の会の忘年会や今年5月の総会終了後に行われたグランプリ贈賞式後の懇親会は大盛況でした。忘年会に至っては予定時間を過ぎてもなお、皆様の会話の渦が収まらず、お帰りになる様子が見られなかったことから、急遽その場で会場の店側と交渉して時間を延長するほどの盛り上がりを見せました。皆様日ごろ思うところを存分に語る良い機会になったのではないかと拝察しています。

もともと放送人の会が発足した目的の一つは会員の皆様が垣根を越えて語り合いながら情報交換し、相互に交流する場を作りたいという思いがあったのだと理解しています。

因みに改めて発足当時の会報の創刊号を読み直してみると、当時の創立準備室長の〝発足の経緯〟の説明の中で

『組織原則のキーワードは四超、超組織、超地域、超世代、超現代で…放送の現状が抱える根本的な問題について、語り合い、発信してゆく…放送人の横断的な精神交流の場（ママ）』と述べています。

この会報発行日の翌日に開催される9月30日の会員の皆様相互の懇親会はその一環として行われるものです。懇親会の具体的な様子は次の回に譲りますが、事務局を預かる総務委員会としては、可能な限りこうした機会を見つけてゆきたいと考えています。

今後の予定としましては、**12月9日に忘年会を予定**していますが、出欠のご案内は11月の初めごろにお送りいたします。

また、会員の皆様から『こうしたらどうか』という具体的なご希望・ご提案も大歓迎ですので、ぜひ事務局までお寄せください。

なお、事務局は月曜日、水曜日、金曜日の午前11時から午後5時まで事務局員が在局しています。私は毎週水曜日の午後に出局しておりますのでお近くにお越しの際はお気軽にお立ち寄りいただければ幸いです。お飲み物を用意してお待ちしていますのでよろしくお願いいたします。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第90回放送人句会

令和五年六月十三日（火）◇於　赤坂・麦屋

出席　林備後　佐々木光野　近藤久仁
　　深尾一化　山登登羊亭（新参加）
　　（以上五名）

兼題　虎が雨　蛍　虎魚　（業界用語）カンペ

昼酒のそば屋さまよう螢かな　登羊亭
カンペ忘れ走るＡＤ青嵐　フミ
初蛍手の中にある小宇宙　フミ
螢火やあの世から皆降りてきた　フミ
告白にカンペあれかし祭りの夜　一化
夕暮れに寄り添ふ気配虎が雨　フミ
海暮れて波も撓みて螢飛ぶ　備後
母の呼ぶ背戸の河面に初螢　登羊亭
学校は休みにならず虎が雨　備後
海遠くなほも荒ぶる虎ケ雨　フミ
風薫るカンペに込めた淡き恋　久仁
うしろ手に手を繋がれし螢の夜　久仁
ペンチもて虎魚を外す夕まずめ　光野
林間にカンペも読めぬ五月闇　光野
命がけ漁師泣かせの大虎魚　一化
虎魚喰ひ鏡にてらす己が面　光野
カンペ見て今日は何の日桜桃忌　久仁
我輩は外道にあらずと虎魚言ひ　光野
ずぶ濡れのさては仇討ち虎ケ雨　光野
どう捌く俎板見もの鬼虎魚　光野
源平の闘はぬ籠蛍狩り　一化
柴又の別れもつらし虎が雨

第91回放送人句会

令和五年八月二十二日(火)◇於　赤坂・麦屋

出席　中村フミ　佐々木光野　近藤久仁
　　深尾一化　松田幸雄　山登登羊亭
　　（以上六名）

兼題　夜学　鯊　鰯雲　（業界用語）消え物

もつれ合ふ鯊釣糸よ知らぬ人　光野
鰯雲富士より出でて相模灘　久仁
立ち喰ひ屋大盛りたのむ夜学女子　久仁
元は野良今は家猫鯊喰らふ　フミ
友と別れサドルを跨ぐ夜学生　久仁
稚児の手にダボはぜ一匹残りおり　幸雄
宴席のはぜの甘露煮残りおり　幸雄
吾もしよせん消え物なるか秋の空　一化
消え物や消えずに残る夏の月　フミ

コップ酒鎮めに一杯夜学熱　久仁
ロケ移動車窓に映る夜学の灯　幸雄
ひさびさに墓石洗ひて鰯雲　幸雄
いわし雲すいぶん遠くへ来たもんだ　一化
消えものにまぎれこみたる青葉木菟　登羊亭
汐満ちて戯ける沙魚や一人舟　登羊亭
夜学とは酒を嗜む流儀なり　フミ
夜学終へ早や新聞を配る刻　一化
母の歌聞こゆ夕日の鰯雲　フミ
うんちくの客いて鯊のなお旨し　フミ
夜学へと摂氏三十五度の路地　光野
鯊天で徳利二本追加なり　一化
初恋を打ち明けし土手鰯雲　フミ
消え物の水茄子摘む直しの間　久仁
定年や職業欄は夜学生　光野
はぜ釣や秋天仰ぐ汽水灘　登羊亭
鰯雲ふるさと離れ半世紀　フミ

次回・第92回
２０２３年10月10日（火）赤坂・麦屋
兼題　栗　肌寒　案山子
（業界用語）オンエアー

☆☆☆☆☆☆☆

新入会員 紹介

大浦 勝（おおうら　まさる）

55年佐賀県唐津市生まれ。77年テレビ長崎入社、技術局配属。87年に制作部に異動。以後、情報番組やドキュメンタリーのディレクター、プロデューサー。「干潟の挽歌～閉ざされた海・諫早湾～」「茜さす海（放送文化基金賞優秀賞）」「五島のトラさん（FNSドキュメンタリー大賞グランプリ、上海テレビ祭マグノリア賞）放送人グランプリ2022『グランプリ特別賞』。報道制作局長、常務取締役後、22年テレビ長崎を退職。YouTubeチャンネル「まさるの大旅小旅」を立上げ。

入会のごあいさつ

1年前、退職直前に放送人グランプリ特別賞を受賞した縁もあって入会しました。

在職中は主に制作畑でローカル情報番組のディレクター、プロデューサーを担当し傍らドキュメンタリーの制作に励んで来ました。地方局にとってはドキュメンタリーが全国に発信できる唯一の場で民放連盟賞等の入賞を目指し奮闘しました。代表作の「五島のトラさん」は37歳から取材を始め22年経た59歳の時、取締役の立場ながら完成させました。その後、劇場版も作り全国のミニシアターで上映、文化庁の記録映画大賞も頂き私のテレビ局人生の集大成となりました。

去年、退職後すぐにYouTubeチャンネル「まさるの大旅小旅」を立上げました。カメラは一眼レフの少し上等を購入、三脚など機材はヤフーオークションやメルカリで。当初はチャンネル登録が思ったように増えず苦戦しました。手法がテレビ時代の延長、真面目過ぎる、グルメや旅ものが良いよ。など家族や知人から助言を受け色々チャレンジしました。例えば食器を洗いながら本編に入っていく「茶碗洗いトーク」など。試行錯誤しましたが今後は得意のドキュメンタリーに絞ろうと思っています。

最近では過疎化が進む地域に伝わるケンカ祭りを取材したところ20分の長尺ながら高評価で再生回数も登録数もぐんぐん伸びています。収益を得るには登録数が１０００を超えなければなりません。あと一息です。現職の時はいつも視聴率に追われて来ましたが今は視聴回数とチャンネル登録数に目を配る日々です。

取材先で放送局クルーと遭遇するとほぼ3人のクルー、私は1人で走り回っています。放送局とはライバルです（笑）。以前は社名を出せば気軽に取材出来たのに個人だと中々難しい時もあります。でも1人なので時間にも追われずこだわりの映像をしっかり撮ることができます。

地方波放送では県域でしか見ることが出来ませんでしたがYouTubeは全国で見ることが出来ます。私の「まさるの大旅小旅」是非覗いてみて下さい。よろしかったチャンネル登録もお願いします（笑）。目指すはYouTubeに発信しながらドキュメンタリー映画を作ることです。皆さまこれからよろしくお願い致します。

若泉 久朗（わかいずみ　ひさあき）

61年東京生まれ。84年ＮＨＫに入局し、沖縄放送局に赴任。88年東京のドラマ部へ。以降は、一貫してドラマ制作に携わる。主な作品：朝ドラ「ひらり」「ほんまもん」「てるてる家族」、大河ドラマ「風林火山」、特集ドラマ「クライマーズ・ハイ」、ドラマ10「セカンド・バージン」など。

ドラマ部長、制作局長、札幌放送局長、理事を経て退職。現在はＫＡＤＯＫＡＷＡの執行役員。ジャニーズ事務所の顧問。

入会のごあいさつ

このたび放送人の会に入会させて頂きました。もともとＮＨＫでドラマ制作に関わってきました。映像コンテンツは放送とネットの融合、グローバルＯＴＴとの連携によるグローバル化、などまさに戦国時代、新しいビジネスモデルの開拓が喫緊の課題になっています。オールジャパンの底力が問われています。放送人の会は今こそ放送業界のハブとなる時です。微力ながら私も尽力して参ります。

何卒よろしくお願い申し上げます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

訃報

吉村 豪介（よしむら　ごうすけ）

二〇二三年八月二十一日（月）享年88。

昭和11年生まれ。一九五九年ＮＨＫ編成局映画部撮影課配属。首相官邸（ニュース応援）で安保自然成立時の岸首相を撮影。「蔵王の樹氷」「志賀高原・発哺温泉の入浴する野猿」など撮影。仙台、福岡、大阪、東京に勤務。

08年～12年ＮＨＫテクニカルサービスを経てフリーに。

放送人の会では、14年1月の入会から20年3月まで「放送人の証言」などの収録・撮影にカメラマンとして活躍していただきました。

ありがとうございました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

竹中 一夫（たけなか　かずお）

二〇二三年六月七日（水）心筋梗塞で急逝。享年75。ご冥福をお祈り申し上げます。

昭和24年生まれ。一九七二年ＮＨＫに入り、高知放送局を経て、科学産業番組班で「自然のアルバム」「ウルトラアイ」科学ドキュメントなどを制作。91年社団法人「ハイビジョン推進協会」、97年長野放送局放送部長（長野五輪対応）、99年総合企画室局長職・デジタル放送推進。08年（株）放送衛星システム（Ｂ-ＳＡＴ）代表取締役社長、13年より同・特別経営主幹。

「竹中一夫氏（Ｂ-ＳＡＴ第5代目社長）は、

ハイビジョンやBS普及の最大の功労者である」（月刊「NEW MEDIA」8月号より）

〜〜〜〜〜〜

竹中一夫氏 逝く

前川 英樹

一九八〇年代の半ばだっただろうか。私はTBSでハイビジョン開発を担当していた。

ハイビジョンの前は高品位テレビと呼ばれていたそれは、もちろんNHKが先駆的な立場にあったが、TBSは民放では最も早く実験的ソフト（今ならコンテンツというだろう）に取り組んでいた。NHKとは色々な接点が出来て人間関係も広がった。

そんな中で、ある年新人研修の一環としてハイビジョンスタジオの見学をNHKに申し込んだ。まだ民放ではスタジオ機能がハイビジョン対応の段階ではなかった。その時のNHKのハイビジョンポリシーの担当者が竹中氏で、様々な会合で私と顔を合わせていた。

竹中氏は「それでは、NHKのスタジオ見学に来てください。私がNHKの中を仕切ります」と言った。当日、TBSの新人数十名と研修担当の人事部のメンバーが訪問した。竹中氏はハイビジョンについてのガイダンスをした後に「ここにいるTBSの新人の皆さんは、これからNHKのライバルになる人たちです。放送の世界で競い合っていきましょう」というような挨拶をしてくれたと記憶する。

後で聞けば、その時スタジオにあったハイビジョン機材はNHKの新人はまだ触っていないもので「なんで外（TBSの新人）に触らせるのか」というクレームが内部からあったという。

竹中氏はその後デジタル化対応の責任者として、私のカウンターパートとしてだけでなく、民放各局のメディア開発セクションとまめに付き合っていた。民放も、そして多分NHKも、経営方針があまりタイトになる前で、それぞれの担当者が自由に、言ってしまえば勝手気ままな余地を含んだまま議論することが出来たのだ。まだ流動的で面白い時代だった。

そうか、竹中氏も逝ってしまったのか。残念だなぁ……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

編集後記 ▼恒例のお詫びです。3頁3段目の写真が不鮮明になり、札幌の林健嗣さん、熊本の村上雅通さん、ご免なさい。web参加のお二人を会場のモニター出して、アナログで写真に撮ったものでした。次回からは、オンライン会議のスクリーンショットを掲載予定。失敗しなければ・・・（不安）。▼古賀茂明氏がJの報道で、犯罪なのだから『性加害』という語感の弱い言葉では無く、『性虐待』とか『レイプ』という言葉を使うべきではないか」と書いた。［AERAdot.9・19］今号のJに関しては、これに倣っている。▼9月27日のNHK稲葉会長と山名総局長の会見で、J所属のタレントは「本日から、新規の出演契約は行わない、補償と再発防止への取り組みが着実に行われていることを確認されるまで」と述べた。紅白も新規の仕事とのこと。▼先輩の負債を引き受ける現場は大変でしょうが、お願いします、「新しい紅白を作るぞ！」の気概で、頑張って下さい。▼座談会参加の論客諸氏、会員短信を寄稿された会員諸氏、新入会員のお二人、皆さまありがとうございました。▼前川さんには、急遽の発注で表紙の巻頭言と裏表紙の追悼文を書いて頂きました。間に短信と特別寄稿（自費）があって、前川さん大活躍の会報です。**▼次号の会報は100号です。**特集号にするか、あえて普段のままか？　と、悪夢が蘇る、大阪発『普段着の正月ドラマ』で惨敗したことを・・・。事務局まで「特集号の提案」大募集中！（たかゆき）

会員名簿

2023.09.29 現在

【あ】藍澤幸久　相田洋　青木裕子　青山悌三　秋田和典　雨宮望　新井和子　【い】石井彰　石井ふく子　石田研一　石橋映里
石橋冠　石原信和　磯智明　板谷駿一　市岡康子　市川哲夫　市村元　伊藤博文　井上佳子　今井義典　芋原一善　岩澤敏
岩瀬弥永子　【う】上村忠　浮田周男　臼杵敬子　【え】江川雄一　遠藤利男　【お】大池雅光　大浦勝　大川光行　大沢悠里
太田昌宏　大類なぎさ　緒方陽一　岡田裕克　岡室美奈子　岡本勉　小川治　小川和之　小河原正巳　織田晃之祐　【か】加賀美幸子
柏木登　片岡敬司　加藤滋紀　加藤拓　加藤義人　金平茂紀　川平朝清　鎌内啓子　亀谷弘美　軽部淳　川喜田尚　川渕恵子
河邑厚徳　【き】北川信　北出晃　北村美憲　北村充史　木下浩一　木原毅　木村成忠　【く】工藤英博　隈部紀生　訓覇圭
黒崎博　黒沢淳　【こ】小池勝次郎　河野尚行　小玉滋彦　後藤和晃　小山帥人　近藤邦勝　今野勉　【さ】斎藤秀夫　斎明寺以玖子
寒河江正　坂元良江　桜井元　佐々木彰　佐々木光政　佐藤敦　佐藤幹夫　佐藤理恵子　佐野有利　【し】塩田純　重延浩　重村一
重盛政史　静永純一　柴田陽一郎　清水誠　志村一隆　下崎寛　下重暁子　下村幸子　白井博　新山賢治　【す】菅野高至
菅野嘉則　杉田成道　鈴木俊樹　鈴木典之　鈴木弘貴　鈴木芳夫　鈴木嘉一　須磨章　【せ】清野豊　関佳史　せんぼんよしこ
【そ】曽根英二　【た】高田宏　田澤正稔　多田健　田中秋夫　田中直人　田中典子　田中則広　【ち】千葉邦彦
【つ】塚原あゆ子　塚本幹夫　辻本昌平　土屋敏男　つボイノリオ　露木茂　鶴橋康夫　【と】東城祐司　戸田桂太　富沢一誠
豊原隆太郎　鳥谷規　【な】長井展光　中込卓也　中崎清栄　中島僚　中島由貴　永田浩三　永田俊和　中村敦夫　中村克史
中村季恵　中村芙美子　中山和記　【に】西村与志木　仁藤雅夫　二宮文彦　【ぬ】沼田通嗣　【の】信井文夫　延江浩
【は】萩原豊　林健嗣　林宣昭　林安二　原田令嗣　【ひ】日笠昭彦　玄武岩　【ふ】深尾隆一　藤井チズ子　藤井正博
藤久ミネ　藤村忠寿　古川重樹　【へ】逸見京子　【ま】前川英樹　牧之瀬恵子　増山麗央　松尾羊一　松田幸雄　黛りんたろう
丸山友美　【み】三上義智　光原朋秀　三原治　三村景一　三村千鶴　宮川鑛一　宮崎洋　【む】村上光一　村上雅通　村上佑二
村田亨　【も】本木敦子　元田成　諸橋毅一　【や】八木康夫　矢島良彰　薮内広之　山鹿達也　山崎隆保　山崎裕　山路家子
山田尚　山田良明　山登義明　山根基世【よ】吉澤保　吉田賢策　吉村直樹　【わ】若泉久朗　和崎信哉　渡辺浩平　渡辺紘史
（会員 202名）

【賛助会員】　日本民間放送連盟　TBSメディア総合研究所　融合研究所　日本ケーブルテレビ連盟